幼保小の架け橋プログラムに関する調査研究事業

成果報告書

（令和４年度～令和６年度）

機　関　名：　宮城県白石市

１．事業実施の目的

＜事業実施の目的＞

本市はこれまで幼保小の連携として年１回、幼保小持ち回りにより授業参観・保育参観、その後にグループワークや情報交換を行ってきた。平成２４年度に「アプローチカリキュラム」と「スタートカリキュラム」を作成し活用し始めた。その後、幼稚園教育要領・保育指針等の改訂に伴い令和２年３月にカリキュラム第二次改訂版をまとめたが、その後のコロナ禍の影響により感染症拡大防止の観点から、小学校入学時の引継ぎ会等による情報交換の場のみとなり、実践・検証が進まない現状にあった。

課題としては、幼児教育施設の保育の様子と小学校の授業を互いに見合う機会がなくなったこともあり、接続期の教育の質の保障を図っていくための基盤が弱くなっていた。特に小学校側では円滑な接続の重要性や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の理解が全体に進んでいないことがあった。幼稚園教育要領では、「家庭との緊密な連携の下、小学校以降の教育や生涯にわたる学習とのつながりを見通しながら、幼児の自発的な活動としての遊びを通しての総合的な指導をする」と示されている。また、中央教育審議会初等中等教育分科会の幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会では、「小学校教育が幼児教育から学んでアップデートしていくべき」「幼保小の共通理解が進んで、子供たちの遊びの中の学びが充実し、それが小学校以降に生かされることで、教育的内容の質の向上がより一層図られていく」といった意見が出されている。これらのことを本市に当てはめ、幼児期に自発的な活動としての遊びを通して育まれてきたことを生かすことで、児童は主体的に様々な対象と直接関わりながら総合的に学ぶようになるのではないかと考えた。

そこで本市では、この事業を通して令和２年の第２次改訂版を最大限活用し、実践、検証を行い、架け橋期のカリキュラムを作成したいと考えた。また、幼児教育を通して身に付けた力を小学校の教科等の学習にうまく接続することができれば、小学校での生活や学習等でつまずく子供を減らせるのではないかと考えた。

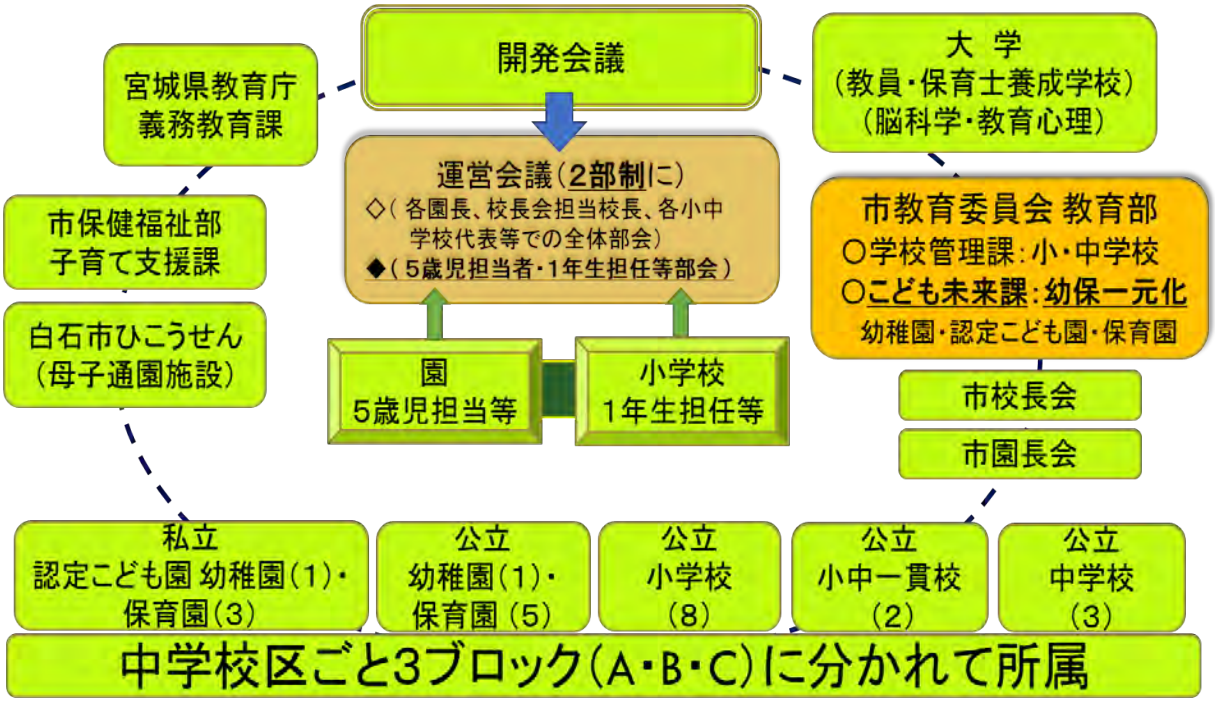
＜園・小学校の施設数等＞

	幼稚園			保育所		幼保連携型 地域裁量型		小学校		
	国立	公立	私立	公立	私立	公立	私立	国立	公立	私立
施設数		1	1	5	3				10	
園児・ 児童数		33	171	151	282				1245	

２．事業実施に当たっての体制づくり

２－１．組織図・体制図

＜組織図・体制図＞



（架け橋期のカリキュラム開発会議）
　教員養成大学教授、大学研究所応用脳科学専門家といった有識者で構成。架け橋期のカリキュラムの開発等について協議する会議体。

（架け橋プログラム運営会議）
　市小中学校長（代表）、全ての公立・私立幼稚園・保育園長、小学校教諭各校から１名、幼稚園代表教諭・保育園代表保育士等、母子通園施設職員で構成（有識者の参加はなし）。開発会議での議論を受け、具体的な運営等について協議・検討し、具体策を協議し提案する会議体。

（架け橋プログラム運営会議 第２部：５歳児担当者・１年生担任等部会）
　市内各園から５歳児担当者（１名）、各小学校から１年生担任等（１名）、教育部幼児教育アドバイザー、指導主事で構成。各園、各小学校が実践したカリキュラムについて協議・検討し、カリキュラムを更新・改善し提案する会議体。

（中学校区による合同会議等）
　３つの中学校区に分かれて一日体験研修及び研修後の合同会議、交流活動等を行いながら顔の見える関係構築を図り、架け橋期の取組について協議する会議体。
・Ａ：保育所３（私立１、公立２）、認定こども園幼稚園１（私立）、小学校３、中学校１
・Ｂ：保育所２（私立１、公立１）、幼稚園１（公立）、小学校３、一貫校１、中学校１
・Ｃ：保育所２（私立１、公立１）、小学校２、中学校１

＜体制づくりの進め方＞

（令和４年度）

【主担当部局】　白石市教育委員会　学校管理課（公立幼稚園・公立小中学校担当）

【主な関係部局】白石市保健福祉部　子ども家庭課（保育所・認定こども園担当）

教育委員会学校管理課が「架け橋プログラム事業」の事務局を担い主担当となり、市内保育所、認定こども園を担当する子ども家庭課に協力をもらうことにした。この事業の体制を立ち上げるにあたり、市校長会の理解を得て幼保小連携担当校長を増員した。平成２４年のカリキュラム作成以降、市校長会の担当校長が幼保小の連携を担ってきたが、この事業ではカリキュラム作成や各研修を推進するためにそのチーフ役となる担当校長を増員した。

４年度は公立の幼稚園、保育所と小中学校を対象に事業を進めた。校長会から「架け橋プログラム事業」に中学校も加わり学びの連続性について内容を共有することになり、中学校区ごと３つのブロックに分かれて交流活動や研修に取り組む体制を取ることにした。

〇課題

・学校管理課、子ども家庭課ともに架け橋期のコーディネーターや幼児教育アドバイザーの配置は行っていないため、主担当部局の学校管理課の指導主事と小学校長が中心となり事業を進め、幼稚園長、保育園長との話合いをもつ機会が少なくなりがちであった。

・私立の保育所、幼稚園は５年度からの事業への参加としていたこと。

〇課題への対応

・会議を行う際の依頼に関して、学校管理課からは幼稚園と小中学校、子ども家庭課からは保育園等と所属による違いがあり２種類の依頼文等を作成しなければならない課題があったが、主担当である教育委員会と幼保小連携担当校長名で会議等を主催することを子ども家庭課に承諾してもらい会議運営の効率化を図った。

・リーダー的な役割を果たす協力校の校長が協力園の園長と連絡調整を行いながら、横の連携を進めた。

・５年度（２年目）の４月から事業に参加してもらうため、学校管理課の担当が私立の保育所、幼稚園を訪問して架け橋プログラム事業の内容と本市の計画を説明しながら参加協力に理解を得ることができるように努めた。全ての園長から参加の承諾を得て、開発会議への代表委員についても了承を得た。

（令和５年度）

【主担当部局】　白石市教育委員会　学校管理課（公立幼稚園・公立小中学校担当）

【主な関係部局】白石市保健福祉部　子ども家庭課（保育所・認定こども園担当）

令和５年３月に私立の保育園長、幼稚園長にも管理職研修に参加してもらい、４年度の架け橋プログラム事業の取組について説明を行い、５年度４月からは市内全ての就学前施設・小中学校で事業に取り組む体制となった。

（令和６年度）

【主担当部局】

白石市教育委員会教育部　学校管理課（公立小中学校担当）

〃　　〃　　こども未来課（幼稚園・保育所・認定こども園担当）

【主な関係部局】白石市保健福祉部　子育て支援課（担当）

６年度の４月から組織が再編され、教育委員会に「こども未来課」が新設となった。背景として保育園に関する業務、幼稚園・認定こども園に関する業務を統合し、未就学児の教育の充実と推進を図るとともに、小中学校との連携体制を一層強化することを目的とした。こども未来課の新設で幼保一元化となり、市の園長会に適宜、学校管理課の架け橋担当も出席して情報共有を図ることが容易にできるようになった。

また、８月から運営会議を２部制とした。第１部はこれまでのメンバーで協議を行い、第２部は５歳児担当者と１年生担任等が参加し、主に実践内容と架け橋期のカリキュラムの話合いを行う機会とした。定期的に振り返りを行う場としての体制が整った。

２－２．協力園・協力校

＜協力園・協力校の概要＞

設置者	施設類型等	園名・校名	幼児・児童数等	接続園・校のグループ
公立	幼稚園	白石市第二幼稚園	33 名（５歳児：15 名）	B
公立	保育所	白石市南保育園	73 名（５歳児：15 名）	B
公立	小学校	白石市立大平小学校	75 名（小　１：19 名）	B

＜協力園・協力校の指定プロセス＞

上記の２園・１校を指定した経緯は次のとおりである。

本市の幼保小連携を理解し、接続カリキュラム作成等に携わっていた管理職及び教師が配置されていたことである。２園の園長及び小学校の１年生担任が平成２４年度以降の接続カリキュラムの担当として携わり幼保小の連携の必要性を理解している人物であったことに加え、小学校の校長は過去に指導主事の経験があり幼稚園の保育を参観してきた経験があり、本事業において研修を総括する役割であったことである。３施設の園長及び校長は開発会議のメンバーにもなっている。

また、３施設は同じ接続園校のグループであること、本市の比較的中心部に立地しており保育や授業を市内各園、各校に提供する際も集まりやすいことにも留意した。

＜自治体と協力園・協力校の連携・協働の取組＞

４年度は、学校管理課の指導主事（元小学校長）と園長、校長が会議以外にも適宜意見交換をしながらカリキュラムにそった交流活動の実践に向けて話合いを行った。

５年度からは協力園を退職した保育園長が学校管理課に指導主事として配属されたことにより、主として幼稚園と保育所へ足を運ぶ機会を増やすことができるようになった。

６年度の７月に実施した理解研修会において、協力園と協力校の交流活動実践事例について発表を行った。交流活動のプロセスや事後活動、５歳児及び小学生の変化等について紹介し、各園、各校で参考となるように資料を配布した。

実践発表では、こども未来課の幼児教育アドバイザーと協力園の５年度５歳児担任、協力校の１年生担任の３人が資料に沿って取組を語り合った。資料作成と実践発表に向けて、協力園の園長、５年度５歳児担任、協力校の校長、１年生担任、教育委員会学校管理課及びこども未来課の担当が打合せを行い、準備を進めた。

＜協力園と協力校同士の連携・協働の取組＞

１　協力保育園と協力校の連携

南保育園と大平小学校の園長、校長及び担当者同士が話し合い、生活科を中心とした活動に基づく交流計画を立案し、交流の目的や意義を明確にして実践を行った。園・校を行き来するだけでなくオンラインで交流したり、手紙を交換したり、公園で合流して「秋探し」をしたりするなど、子供が同じ経験、活動を経験することで親しくなるきっかけができるようにした。

（課題点とその対応）

・２つの協力園と協力小学校での立地に距離があり、交流活動の際に移動する交通手段がないことが課題であった。市で共有できるスクールバスの活用回数にも制限があったため、事業費から交流活動の際に互いが往来するバス代を充当し必要な時に交流できる移動手段を確保できるようにした。このことにより、交流を必要とするタイミングで交流活動を実施できるようになった。

・１年生担任と５歳児担任との打合せ等の時間を確保することが課題であった。話したいことについてタイミングを逃さないようにするため５歳児担任と１年生担任が電話で打合せをする機会が多くなってしまった。交流活動の前後や当日は、保育園長と小学校長の理解を得ることで、５歳児担任が都合のつく午後の時間帯に打合せをもつことで時間を確保できるようにした。

２　協力保育園と協力幼稚園の連携

南保育園と第二幼稚園間で５歳児同士の交流を行った。互いの園の友達に親しみをもつようになるとともに、各小学校に入学した時に互いに知っている子がいることで安心できる人間関係づくりにもつながることも視野において交流を行った。前年度の１２月に話し合い、見通しをもって交流計画を立てるようにした。

交流活動後は、その日の午後に両園の主任と５歳児担任の４人で話合いを行い、振り返りをして次回の交流につなげていくようにした。

（課題点とその対応）

・両園の行事がすでに計画されていたことから行事のない日に交流日を調整するのに苦労したことが課題であった。交流への子供たちの声を拾い上げ、互いに自園の行事の見直しを図ることにした。

・交流活動の成果や課題を担当者以外の職員も園内で共有できるようにするために年間計画と振り返りを一覧に整理し園計画に反映させるようにした。

令和6年度　第二幼稚園　交流年間計画と振り返り

回数	日にち	場所	交流内容	ねらい	備考	振り返り
①	5/1(水) 予備日 2(木)	益岡公園 (芝生公園)	・顔合わせ ・鬼ごっこをして一緒に遊ぶ (へびとつばめ・ひっこし鬼)	○お互いの園の友達に親しみをもつ。		○GWの中日だったので休む子が多く、GWを避けて計画立てると良かった。 ○偶然来ていた第一小(1,2年)とも触れ合える時間もあり良かった。 ○お互いの園で遊んでいる鬼ごっこの遊びは、張り切ってルールを教えながら一緒に遊ぶ様子が見られ、無理もなく良かった。 ○子どもから一緒に帰りたいとの声があり、手をつないで帰ってくることができた。子どもから次につながる声なども出たので、思いを受け止めたり楽しみながら交流もしていけるようにしていきたい。
②	6/18(火) 予備日 19(水)	南保育園	・園内巡り ・ふれあい遊び ・じゃんけん列車 ・自由あそび	○友達との再会を喜び、ふれあい遊びを楽しむ。 ○第二幼稚園の友達に喜んで園内案内をする。	雨天の為予備日に実施	○雨天予報の為、事前に予備日に変更したり、遊びの場も変更したり臨機応変に対応した。予備日を設定していて良かった。 ○園内巡りは子ども達自身で考え、案内をしたので個人差はあったが達成感をもてた。二幼の園児はもっとゆっくり見たい様子で、焦りながら説明する保育園児の姿が対象的だった。 ○ふれあい遊びでは、各園で経験している遊びを取りあげたので、喜んでふれあい無理なく関わることができていた。遊びによってはピアノも活用すると良かった。
③	7/2(火) 予備日 3(水)	第二幼	・園内巡り ・ふれあい遊び ・自由あそび	○お互いの園の友達とふれあって遊ぶことを楽しむ。		○前回の振り返りから園内巡り方を子どもと考えたので、スムーズに案内することができた。 ○職員同士で「おちゃをのみに」の遊び方など細かいところまで確認しておくと戸惑わず声掛けもスムーズにできたと思った。 ○外遊びは広い園庭で、偏ることなく、保育園にない遊びに興味をもって楽しんでいた。 ○予定時間は過ぎたが、じっくり遊ぶ時間を確保したので、満足していた。
④	9/30 (月)	白石城址公園 第二幼	・運動会でのバルーンの演技を見せ合う ・ふれあい遊び ・鬼ごっこ	○友達との再会を喜び合いながら、お互いの園の友達とふれあって遊ぶ。 ○バルーンの演技を見せ合ったり、一緒に遊んだりしながら交流を楽しむ。		○運動会後のすぐの交流で演技披露は無理がなく良かった。しかし、交流の話や気持ちの盛り上げ、準備等の面で月曜日以外にすると良かった。 ○天気が心配だったが、外での交流や園外の白石城でできたのも良かった。 ○内容は盛りだくさんだった。バルーン、鬼ごっこは体力使う。何をねらうかをはっきりさせ、内容を検討していくことが必要。
⑤	12/10 (火)	南保育園	・劇遊びを見せ合う (大平小1年生も招待する)	○大平小学校や第二幼稚園の友達に見せようと喜んで役になりきって表現する。 ○劇あそびに京見を持ち、喜んで見ようとする。		○これまで交流して仲良くなった友達に見せることを、張り切っていて、お互いに良い刺激になっていた。また、いろいろな人に見てもらうことでさらに自信にもつながっていて良かった。 ○カリキュラムの共通の歌「友達賛歌」を幼保小みんなで歌った。顔が見える円の体系で一緒に歌えたことも良かった。 ○小学校を招待するしないは、各園の状況で、無理なくで良い。 ○次年度は、今年度と同じ位の交流を続けていく。サツマイモの栽培を一緒にする計画も検討していきたい。 ○内容も無理なく、子どもの声からつなげて交流してきたが、交流の日だけでなく、散歩の途中で遊びに行くなど気軽に関わりがもてるようにしても良い。
⑥	12/11 (水)	第二幼	・劇遊びを見せ合う (第二小1年生も招待する)	○南保育園の友達に劇遊びを見てもらうことを楽しみに、自信をもって演じる。 ○第二幼稚園の友達の劇あそびに興味をもちながら、楽しんで見る。 ○お互いの園の友達とふれあってあそぶことを楽しむ。		

＊交流の事前に打ち合わせを行い、その都度指導案を作成する。交流日の午後には振り返りをし、次回の交流につなげていく。

＊オンラインでの打ち合わせも活用していく。

＊交流最終日の振り返りの中で、1年間の振り返りや次年度に向けての話し合いもする。

３　協力幼稚園と私立保育園の交流に発展

協力園同士の交流をきっかけとして、第二幼稚園と白石はるかぜ保育園の５歳児が交流活動を行うようになった。両園の近隣となる白石第二小学校と交流活動を行う際は、合同で行うことにつながった。

２－３．協力団体等

＜協力団体等の概要＞

団体等名	団体等の活動概要
宮城教育大学 上廣倫理教育アカデミー	ハワイ大学で開発されたｐ４ｃ（探究の対話）の手法を白石市の幼稚園、保育園、小中学校等で活用するために協力を得ている。

＜各協力団体等との連携＞

本市は小中学校において 2014 年から上廣倫理教育アカデミーの支援を得て、p4c の実践を行ってきている。自分の思いを安心して話すこと、他の人の考えを聞いて問いに対する自分の考えを深めることなどの成果をあげている。

４年度はカリキュラム開発会議の委員である宮城教育大学の佐藤哲也教授がアカデミーの所長でもあったことから公立幼稚園での実践に関して訪問参観による助言をもらい、実践を推進していた。

６年度からアカデミーに所属し特任教授として p4c の実践と指導助言に尽力した庄子先生を本教育委員会こども未来課の指導主事として迎え、保育園での実践を進める体制が整った。

２－４．架け橋期のコーディネーター等

＜架け橋期のコーディネーター等の概要＞

新規／継続	事業に関わった年度	役職名	経歴
新規	令和４～６年度	指導主事（学校管理課所属）	元公立小学校長、指導主事として幼稚園訪問経験あり
新規	令和５～６年度	指導主事（こども未来課所属） 幼児教育アドバイザー(R6～)	元公立保育園長、県幼児教育アドバイザー資格取得

＜架け橋期のコーディネーター等の役割等＞

本市では架け橋期のコーディネーター等の任命は行わず教育委員会学校管理課及びこども未来課の指導主事が対応した。

２名ともに経歴に記載したとおり、元小学校長と元保育園長で本市の小学校、保育園を退職して教育委員会の指導主事として配属となった。元保育園長は令和４年度にはカリキュラム開発会議の委員であったため実際は令和４年度から本事業に関わりがあった。

４年度は学校管理課の指導主事が事務局として、小学校長と連携して事業運営の計画や事業理解のための資料を作成した。また、協力園、協力校の保育及び授業参観を行い保育や授業の内容について話し合った。

５年度から２名体制となり、小学校及び幼稚園、保育園に出向く際も２名で授業や保育を参観し、それぞれの立場を理解した上で助言を行った。実践の振り返り研修や一日体験研修も参観し、事後の話合いにおいてアドバイスを行った。特に幼児教育は小学校教育の前倒しではないことについて保育内容について話題となった事例について具体的に助言を行った。

６年度はこども未来課の指導主事が幼稚園・保育園の主任者会に参加し、架け橋期の取組に関することや保育についての指導助言を行った。

小学校経験者と保育所経験者が教育委員会内にいることによりそれぞれの校長や園長からの相談が受けやすくなってきたこと、特に各園長が接続に向けて不安に思っていることなどを聞くことにより小学校に検討してほしいことを具体的に提案できるようになったことが成果である。

＜課題点＞

２名とも架け橋期のコーディネーターや幼児教育アドバイザーを専任していないため、別の公務により全ての研修に対応できないこともあるのが課題である。今後も、県の幼児教育アドバイザー講習を計画的に受講し、コーディネーター等の役割を果たす人物を育成していく。

３．架け橋期のカリキュラム開発会議

３－１．会議委員等

＜会議委員一覧＞

会議の代表者氏名	半沢　芳典		他１６名（実人数）
会議委員氏名	所属機関 所属・職名	具体的な役割分担	従事期間
佐藤　　哲也	宮城教育大学 副学長 教授	幼児教育の知見からの指導・助言	令和４年７月～７年３月
榊　　浩平	東北大学加齢医学研究所 応用認知神経科学センター 助教	認知脳科学・教育心理学の知見からの指導・助言	令和４年７月～７年３月
平間　　正信	白石第二小学校 校長	市校長会 小学校代表 開発会議議長 運営会議兼務	令和４年７月～７年３月
八島　　信	福岡中学校 校長	市校長会 中学校代表 運営会議兼務	令和６年４月～７年３月
佐藤　　嘉代	南保育園（公立） 園長	公立保育所代表　（協力園） 運営会議兼務	令和５年４月～７年３月
大庭　　美香	第二幼稚園(公立) 園長	公立幼稚園代表　（協力園） 運営会議兼務	令和４年７月～７年３月
佐々木　淳子	白石はるかぜ保育園（私立） 園長	私立保育所代表 運営会議兼務	令和５年４月～７年３月
風間　ちゑ子	認定こども園 ひかり幼稚園（私立） 園長	私立認定こども園幼稚園代表 運営会議兼務	令和５年４月～７年３月
菅原　　博	深谷小学校 校長	市校長会幼保小連携総括担当 運営会議兼務	令和５年４月～７年３月
河原　　正樹	越河小学校 校長	市校長会幼保小カリキュラム担当　運営会議兼務	令和６年４月～７年３月
小澤　　裕	大平小学校 校長	市校長会幼保小連携研修担当（協力校）　運営会議兼務	令和６年４月～７年３月
佐藤　　哲生	教育委員会教育部 学校管理課長	小学校・中学校担当	令和５年４月～７年３月
山田　せつ子	教育委員会教育部 こども未来課長	幼稚園・保育園等担当	令和５年２月～７年３月
星　　健太郎	学校管理課 教育専門監	架け橋プログラム開発会議 事務局代表　運営会議兼務	令和４年７月～７年３月
安達 まゆみ	こども未来課 指導主事・幼児教育アドバイザー	架け橋プログラム開発会議 事務局 幼児教育アドバイザー 運営会議兼務	令和４年７月～７年３月
小野寺　　修	学校管理課 指導主事	架け橋プログラム開発会議 事務局　運営会議兼務	令和４年７月～７年３月

＊年度末の人事異動による委員の交代があった

＜会議委員の決定プロセス＞

〇架け橋期のカリキュラム開発会議は事業開始に当たって新設した。

〇開発会議委員会について
学識経験者として次の２名に依頼。
（宮城教育大学　佐藤哲也教授）
本市は宮城教育大学と連携を結んでおり、幼児教育に係る専門的知見から指導助言をもらいたいと考えた。さらに、協力団体である上廣倫理教育アカデミーの所長も兼任しており、p4c の実践面からも助言をもらうためにメンバーとして参加いただいた。
（東北大学加齢医学研究所　榊浩平助教）
本市の小中学生は、メディアに４時間以上接している割合が全国平均よりも高い現状にあったことから、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を小中学校が理解し、発達段階に応じて生活習慣に係る自己管理能力（メディアコントロールを含め）を育成することも大切にしたいと考え、認知脳科学・教育心理学の知見からの指導・助言をもらうためにメンバーとして参加いただいた。

（幼稚園及び保育園の園長、小中学校の校長の参加）
コロナ禍で感染症拡大防止の観点から、これまで行われてきた幼保小の交流活動を見合わせていたこともあってか、幼稚園、保育園長や小学校長の話を聞くと互いの施設に対しての思いや遠慮があった。連携・接続を進める上で相互理解ができていなければこの事業はうまく進まないと考えた。
この事業を通して特に幼児教育の理解を小学校へ深めていくことを重要視し、校長に架け橋プログラム事業の内容を理解してもらうことで、各小学校の教職員への理解と実践に向けた意識の共有にもつながることもねらいとした。
令和５年度から、私立保育所の代表園長と私立認定こども園・幼稚園の園長に加わってもらうことにより、市内全ての施設類型の代表者による立場から協議ができる体制となるように努めた。

３－２．開催実績

＜開催実績＞

令和４年度

開催日時	議事次第	主な検討内容・決定事項
１月３０日 14 時～15 時 30 分	・本市の体制と方向性について ・目指す子供の姿、共通の視点について ・７月からの取組について ・接続カリキュラムについて	目指す子供の姿、共通の視点、研修計画と内容について検討を行い、相互理解のための研修内容、カリキュラム作成の方向性が決定した。

令和５年度

開催日時	議事次第	主な検討内容・決定事項
５月１０日 15 時～16 時 30 分	・５年度の成果、課題について ・６年度の体制、研修内容について ・接続カリキュラムについて	接続カリキュラムについて、ねらいや環境構成の表現を検討していくこと、実践した声を反映させていくことを決定した。
９月２６日 14 時 30 分～16 時	・保育及び小学校一日体験研修等について ・接続カリキュラムの今後の検証について	ねらい・目的を明確にすること、子供の変容を捉えるため各園校から一人は同じ者が２回とも参加することが決定した。
２月１５日 14 時 30 分～16 時	・架け橋期全体計画について ・全体構想図(小３～中３)について ・アンケート結果について	全体計画について検討を行い、実践等から聞き取ったことを反映させること、その方法の一つとして p4c による子供の声を拾うことが決定した。

令和６年度

開催日時	議事次第	主な検討内容・決定事項
５月２７日 13 時 30 分～15 時	・６年度の方向性について ・架け橋期全体計画の修正 ・カリキュラムの検証方法について	カリキュラムの検証について検討を行い、５歳児担当と１年生担任が合同で話し合う場を増やすことが決定した。
８月１９日 13 時 30 分～15 時	・実践資料の効果について ・市全体での保育・授業参観、事後研修の機会拡充について	カリキュラムの実践例を資料集として作成し、幼保小で活用・検証することが決定した。
１１月２５日 13 時 30 分～15 時	・カリキュラムの検証・改善の状況 ・カリキュラムの PDCA サイクルのための研修計画について	実践資料集の構成について検討し、「小学校の各教科等における資質・能力とのつながり」を追加することが決定した。
１月２７日 13 時 30 分～15 時	・持続可能な取組、体制について ・次年度の体制、計画について ・今後に向けた指導助言	幼保小間での交流活動について検討を行い、計画的な交流に加え、遊びのプロセスから交流を希望する声が出た際にも交流を行っていくことが決定した。

３－３．成果と課題

＜架け橋期のカリキュラムに関する議論＞

【 研修に関する内容 】

１　一日保育体験・一日小学校体験研修会について

・実施時期、内容、参加対象者、情報交換の視点について確認

　両体験とも、子供たちの姿や変容を見る機会であることから、各園、各小学校から１名は同じ職員が２回とも参加する。それ以外は可能な限り多くの教師や保育士等が参加できるように体制を整える。

・体験研修のねらい、成果と課題、検証方法を市全体で共有できるように可視化する。

２　保育参観・授業参観、事後研修の機会設定についての話合い

・カリキュラムを開発・実践・検証・改善する機会として参観し合うことは重要である。プログラムを開発し実践する者としてリアルな体験や現場の空気感を知ることが重要であり、できるだけ顔を合わせて学び合う機会としていく。

・コロナ禍以前に実施していた３つのブロックによるローテーションの反省を踏まえ、市全体に保育や授業を案内し見合う機会を検討していく。

・７年度は、公立保育園主催のスキルアップ研修、幼保小間交流活動及びその前後の授業等の参観、p4c の実践を市内各園、各校に案内し参観する機会とする。

　⇒　公立保育園主催のスキルアップ研修を保育参観の機会とし、小学校教員も参観し保育について研修を行う。

　⇒　幼保小間の交流活動や事前の準備の様子、振り返りの様子を参観する機会とし、子供の姿や交流活動の流れについて研修を行う。

　⇒　p4c の実践を参観し、カリキュラムにつながる「問い」の内容や子供の声の生かし方について研修を行う。

【 カリキュラムに関する内容 】

１　架け橋期のカリキュラムについて

・各園、各小学校がそれぞれのカリキュラムを互いに理解できるか話し合う機会をもつ。

・ねらいや育みたい力の表現はインクルーシブの視点を大切にした表現にする。

・方法論にとどまらずに幼保小間で意見交換をする機会をつくる。

・実践等から聞き取ったことをカリキュラムに反映させていく。その一つとして子供自身の声を拾い上げる。

・本市の独自性のある取組として「ｐ４ｃ」を全体計画に位置付けていく。

２　架け橋期のカリキュラムの検証、改善について

・カリキュラムの内容について、実践したことを話し合う機会を設定する。「生活をつなぐ」「人をつなぐ」「学びをつなぐ」の３視点に分けて実践した内容を話し合う。各園でやってみた結果と子供の姿を基に話し合う。

・スタートカリキュラムの４月の実践について各校で取り組んだ実践を話し合う。その後、滑らかな接続に向けた内容について幼保小の担当で話し合う。

・各園の５歳児担当者及び各小学校の１年生担任等が接続カリキュラムの実践事例を定期的に話し合い更新・改善を行っていく。

・その対応として運営会議を２部制とし、第２部を５歳児担当者と小学校１年生担任等が話し合う場とする。

・実践事例を資料集として編集し累積していく。実践事例は意識、イメージを共有できる利点がある。自園での保育の参考にできるところはないか検討できるとともに気付いて

いなかったことが見えてくる。また、小学校への伝達資料となり幼児期の経験を生かした授業展開の参考にできる。
・実践から聞き取った５歳児・小学校１年生の声を拾い上げカリキュラムに反映させる。
　大人が聞こえてくる子供たちの声を共有していく。
・「ｐ４ｃ」の実践による５歳児・小学校１年生の声の読み取りが重要となる。
　入学への思い、小学校ごっこ遊び、１年生になって感じる学校生活についてなどを深めていく。
・就学に対する心配なことへの対応は、大人が問い返しを行って思いを拾っていく。

３　就学等に関する５歳児保護者の意識調査について
・小学校入学に向けての不安事や心配事を把握し、結果をカリキュラムや研修に反映させていく。

【 持続可能な取組に向けての体制に関する内容 】
１　今後の体制について
・市で予算化し今年度の体制を基本として取組を継続していく。運営会議については年４回を検討してもよい。

２　架け橋期のカリキュム年間研修計画について
・理解研修、カリキュラム研修、一日体験研修、保育・授業参観、ｐ４ｃ研修を行う。各研修の要項で目的、対象者、内容を共有し、本市カリキュラムの検討、改善に生かしていく。
・カリキュラムの検討は、５歳児担当等と１年生担任等と教育委員会担当が中心となって行い、運営会議に提案していく。

３　実践事例資料集について
・園担当者部会は、各園での実践事例資料集を作成し情報共有を行う。
・小学校担当者部会は、スタートカリキュラムの実践事例資料集、交流活動実践事例資料集を作成し情報共有を行う。
・教育委員会 p4c 担当は、ｐ４ｃの実践事例資料集を作成し研修をサポートする。
　資料集は各園、各小学校に配布、ファイリングして累積していく。

４　幼保間、幼保小間の交流活動について
・園、小学校の交流計画年間予定をまとめ、各園、各校内で周知を図っていく。
・園で、子供たちの遊びのプロセスから、「小学校に行ってみたい」などの話が出た時にも、小学校で体験や交流する機会を確保していく。

【 その他の内容 】
１　事業終了後の取組についての指導助言
・持続可能な取組にするためにエビデンスは重要な視点となる。特に子供の変化を追っていきたい。本県の課題でもある不登校数の変化について手堅く見ていく。また、５歳児の経年変化について小学校１年生、２年生に進級しての思いや声を追跡していきたい。
・取組の継続から発展に向けて、地域全体で育てる視点を見据えていきたい。

＜会議設置による成果と課題＞

＜成果＞

１　開発会議のメンバーである大学教授等による専門性の高い理解研修会を通して、架け橋プログラムの内容や重要性の理解の深化につながるとともに、架け橋期担当以外の保育士等、教職員の理解を得ることにつながった。また、施設類型の違う代表者が議論を交わすことで互いの立場の理解や自園や自校の指導の改善にもつながってきている。

２　５年度から私立の幼稚園・保育所も開発会議に参加し、市内全体で事業に取り組むことができるようになり、架け橋プログラム事業の広がりとともに理解がより深まってきた。

３　開発会議で、園と小学校がカリキュラムに関して話し合う機会を定期的にもつことを大切にしたいという提案を受け、５歳児担当者と１年生担任が集まる回数や時間帯を有効に設定するために運営会議を２部制として後半をこの話し合いにあてた。幼保部会、小学校部会で実践した資料を基に話し合い、その後、それぞれの立場からの気付きをカリキュラムに反映させることができた。このことにより、これまで以上に５歳児担当者と１年生担任等が互いをリスペクトしながらも保育や授業、環境の構成等について本音で話すようになってきた。

４　５歳児及び小学校１年生の声を拾いカリキュラムに反映させていく提案を受け、これまで幼稚園と各小中学校で実践していた「p4c」の実践を保育園でも取り入れるところが出てきた。その結果、保育者が子供たちの様々な考えに気付けるようになった、友達への思いが伝えられるようになったり相手に分かるように話をするようになってきたりする子が増えてきた、遊びの振り返りや集団遊びを友達と決めるなど、みんなで楽しめるようになってきた、などの成果が見られるようになった。

＜課題及び課題への対応＞

１　本市の取組を開発会議や運営会議等に参加していない者も理解できる資料が必要である。目指す子供の姿、「生活をつなぐ」「人をつなぐ」「学びをつなぐ」の３つの視点を可視化できるようにするために、架け橋期のカリキュラム全体計画を作成した。

２　PDCA サイクルが可視化できるように架け橋期のカリキュラム全体計画を随時、項目も検討しながら加筆修正し、より機能的なものにしていく。ｐ４ｃの取組を本市の独自性のあるものとしてカリキュラムに位置付けたい。特に、架け橋期の対象である子供自身の声を拾い上げてカリキュラムを更新していくことも必要である。本市で、小・中学校が実践している「p4c」の実践を５歳児にも取り入れることにした。

４．架け橋期のカリキュラム

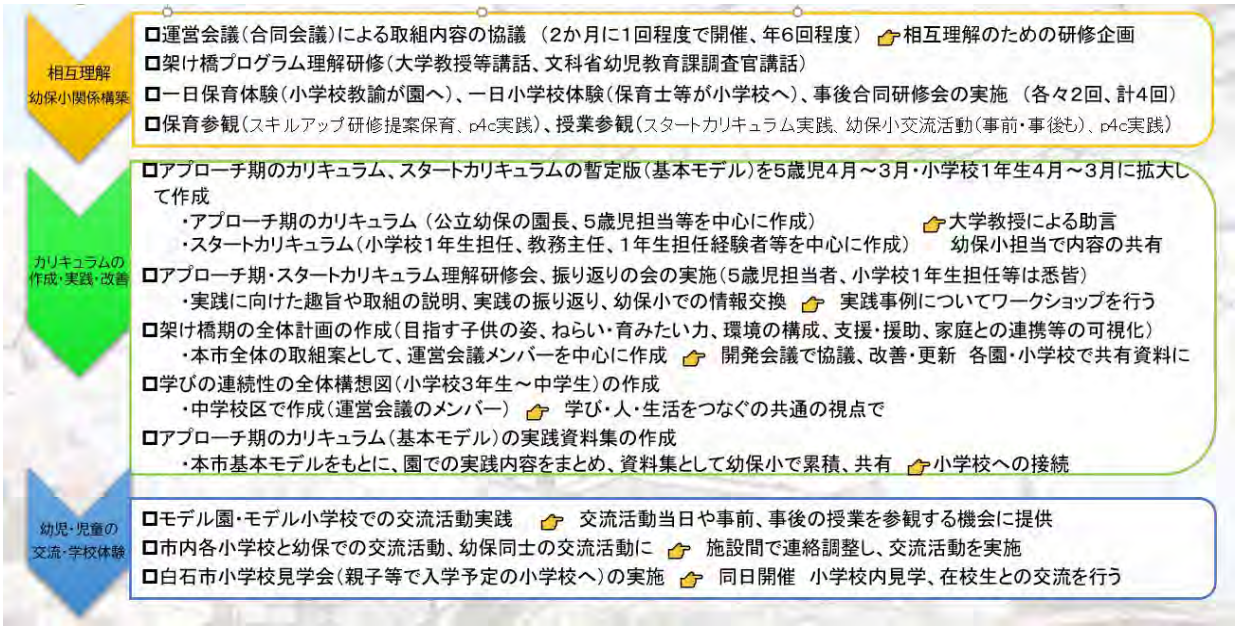
４－１．開発プロセス

＜開発主体について＞
　本市は、開発会議での議論を受け実務的な取組を協議、企画し提案をするために「運営会議」を設置した。架け橋期のカリキュラムは、運営会議の委員が主体となって開発した。

＜本市の事業開始時の課題＞
- 幼稚園教育要領・保育指針等の改訂に伴い、令和２年３月には接続カリキュラム第二次改訂版をまとめたが、その後のコロナ禍の影響で実践・検証が進まない現状であった。
- 感染症拡大防止の観点から、これまで行われてきた幼保小の交流活動を見合わせていた。
- 就学前施設の教諭・保育士等と小学校教員が顔を合わせて話し合う機会が減り、小学校入学時の引継ぎ等による情報交換の場のみとなっていることが多かった。
- 小学校側では「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の理解が進んでいなかった。
- 就学前施設の保育の様子と小学校の授業を互いに見合う機会が少なかった。

　以上の課題を踏まえ、令和４年度は、全ての公立幼稚園、公立保育園の園長、公立小学校の担当校長、各園、各小中学校の代表者から構成した委員が主体となって架け橋プログラム事業の理解を図り、「架け橋期に目指す子供の姿」を話し合い、「自立心」「協同性」「豊かな感性と表現」を特に重要視することに決定した。
　また、既存の接続カリキュラムで視点としていた「生活する力の育成」（生活をつなぐ）「人と関わる力」（人をつなぐ）「学ぶ力の育成」（学びをつなぐ）を共通の視点としてカリキュラムを作成することとした。

＜カリキュラム作成のプロセス＞



　上の図は「研修」「カリキュラムの作成等」「交流・学校体験」のプロセスです。上の項目から下の項目にカリキュラムを展開していきました。

【相互理解・幼保小関係構築の研修について】

事業を始めるにあたり、相互の教育活動の理解と幼保小の関係構築を図ることを基盤とした。架け橋プログラムの取組を理解することからはじめ、相互理解を図るために一日体験研修、保育参観、授業参観を柱に研修を企画・実施した。

⑴運営会議による取組内容の協議（２か月に１回程度で年６回）
　☞相互理解のための研修を企画

⑵架け橋プログラム理解研修（大学教授等講話、文科省幼児教育課調査官講話）

⑶保育体験（小学校教師が園へ）、小学校体験（保育士等が小学校へ）、事後合同研修会の実施（各々２回、計４回）

⑷保育参観（スキルアップ研修提案保育、p4c の実践）、授業参観（スタートカリキュラム実践、幼保小交流活動（事前・事後も含む）、p4c の実践）

【カリキュラムの作成・実践・改善について】

カリキュラムの作成に当たって、はじめに運営委員が本市の目指す子供の姿を話し合った。目指す子供の姿を「自立心」「協同性」「豊かな感性と表現」の３つを特に重要視することにした。

⑴アプローチカリキュラム、スタートカリキュラム（暫定版）を５歳児の４月～３月、小学校１年生の４月～３月に拡大して作成する。

⑵アプローチカリキュラム（公立幼稚園、保育園の園長、５歳児担任等を中心に作成）

⑶スタートカリキュラム（小学校１年生担任、教務主任や１年生担任経験者等を中心に作成）☞幼保小担当で内容を見合い修正する。

⑷アプローチカリキュラム・スタートカリキュラム理解研修会、振り返りの会の実施
・実践に向けた趣旨や取組の説明、実践の振り返り、幼保小での情報交換。
・実践事例についてワークショップを行う。

⑸架け橋期の全体計画の作成（目指す子供の姿、ねらい・育みたい力、環境の構成、支援・援助、家庭との連携等の可視化）
・本市全体の取組案として運営会議委員を中心に作成
　☞　開発会議で協議、改善・更新

⑹学びの連続性の全体構想図（小学校３年生～中学生）の作成
・中学校区で作成（運営会議委員）☞学び・人・生活をつなぐの共通の視点で作成。

⑺アプローチカリキュラムの実践資料集の作成
・本市基本モデル（暫定版）を基に、各園での実践内容をまとめ、資料集として幼保小で累積し共有する　☞小学校への接続資料として活用する。

【５歳児、児童の交流・５歳児の学校体験について】

⑴協力園・協力小学校で交流活動を実践する
　☞　交流活動当日や事前、事後の授業を運営委員等が参観する機会とする。

⑵市内各小学校と幼保での交流活動、幼保同士の交流活動を計画、実践する
　☞　施設間で連絡調整し、交流活動を実施する。

⑶白石市小学校見学会（親子等で入学予定の小学校へ）を実施する
　☞　市内同日開催として計画し、小学校校内見学、在校生との交流を行う。

＜幼保小それぞれの教育内容・指導方法等の相互理解を深めることについて＞
　事業を始めるにあたり、相互の教育活動の理解と幼保小の関係構築を図ることを基盤とした。相互理解を図ること、また、共通の視点で幼保小をつなぐために一日体験研修を行うことが協議された。

【一日体験研修・事後合同研修の実施】
１　一日体験研修
　中学校区の３ブロックに分け、園・小学校に出向いて行う研修。双方の教育活動を理解する機会とする。
⑴ 保育体験研修（７月、１月）　対象者：小学校の教師各校２名～３名
・アプローチカリキュラムの実践等の保育体験、昼食（給食）参観、園職員との情報交換
⑵ 小学校体験研修（４月、１１月）対象者：就学前施設の教師、保育士等１名～２名
・スタートカリキュラムの実践、生活科の授業参観と支援、給食支援、小学校職員との情報交換

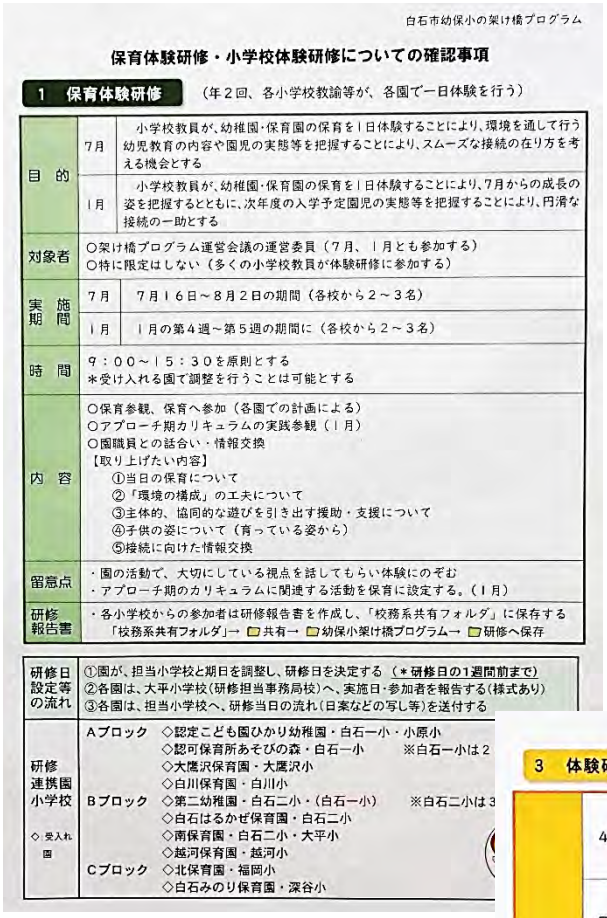
２　体験研修後の合同研修
　各一日体験研修後（４月、８月、１１月、１月）に中学校区ブロックごとに小学校担当校長と受け入れた施設担当者、体験研修参加者で研修内容について話合いを行う。
・保育、授業について、子供たちの活動の様子について話し合い振り返りを行う。
・滑らかな接続に向けて相互の思いや子供たちのことについて情報交換を行い、顔の見える関係性を深める。

３　留意点
・両体験とも子供の姿や変容を見る機会であることから、各園、各小学校から１名は同じ職員が２回とも参加する。
・それ以外は可能な限り多くの教師や保育士等が参加できるように体制を整える。
・体験研修のねらい、成果と課題、検証方法を市全体で共有できるように可視化し、運営会議で確認する。

【小学校体験研修事後情報交換会】

＜相互理解に当たってのポイント＞
・保育体験を通して、５歳児の遊びの様子や諸活動から子供の育っている姿をしっかりと見てほしいこと。（小学校からの体験者）
・就学前施設の「環境の構成」について学ぶこと。（小学校からの体験者）
・入学後の１年生の姿から気付いたことや、１年生の教室等の環境整備について率直に話してほしいこと。（就学前施設からの体験者）
・相手をリスペクトした上で、互いの気付きを話合いで遠慮せずに伝えること。
＜課題＞
・研修報告書や研修後の合同研修から幼児教育でやってほしいことなどを希望する内容があった。指導主事が助言したり運営会議で話題にしたりして具体的な事例から前倒しではないことを学ぶ機会としている。
・１年目の研修では、各施設によって研修時間や情報交換の内容に乖離があった。特に小学校は午後に会議等を設定していない日を研修日として調整することが必要であった。そのことから研修要項を作成し、情報交換の内容や、事後の合同研修で協議したい内容を市全体で確認できるようにした。

【一日体験研修についての要項】



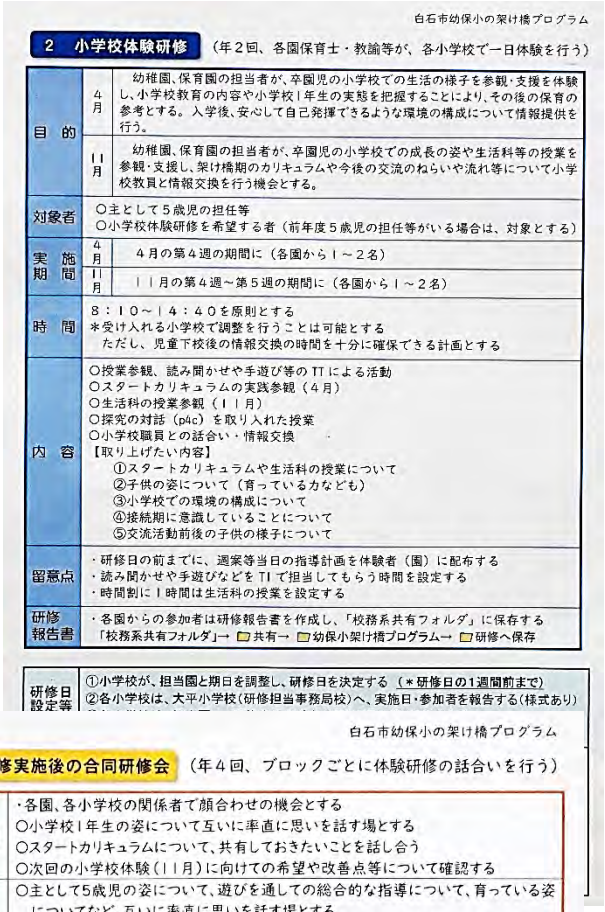
白石市幼保小の架け橋プログラム

保育体験研修・小学校体験研修についての確認事項

1 保育体験研修 （年２回、各小学校教諭等が、各園で一日体験を行う）

目的	7月	小学校教員が、幼稚園・保育園の保育を１日体験することにより、環境を通して行う幼児教育の内容や園児の実態等を把握することにより、スムーズな接続の在り方を考える機会とする
	１月	小学校教員が、幼稚園・保育園の保育を１日体験することにより、7月からの成長の姿を把握するとともに、次年度の入学予定園児の実態等を把握することにより、円滑な接続の一助とする
対象者	○架け橋プログラム運営会議の運営委員（７月、１月とも参加する） ○特に限定はしない（多くの小学校教員が体験研修に参加する）	
実施期間	7月	７月１６日～８月２日の期間（各校から２～３名）
	１月	１月の第４週～第５週の期間に（各校から２～３名）
時間	９：００～１５：３０を原則とする ＊受け入れる園で調整を行うことは可能とする	
内容	○保育参観、保育へ参加（各園での計画による） ○アプローチ期カリキュラムの実践参観（１月） ○園職員との話合い・情報交換 【取り上げたい内容】 ①当日の保育について ②「環境の構成」の工夫について ③主体的、協同的な遊びを引き出す援助・支援について ④子供の姿について（育っている姿から） ⑤接続に向けた情報交換	
留意点	・園の活動で、大切にしている視点を話してもらい体験にのぞむ ・アプローチ期のカリキュラムに関連する活動を保育に設定する。（１月）	
研修報告書	・各小学校からの参加者は研修報告書を作成し、「校務系共有フォルダ」に保存する 「校務系共有フォルダ」→ 共有→ 幼保小架け橋プログラム→ 研修へ保存	

研修日設定等の流れ	①園が、担当小学校と期日を調整し、研修日を決定する （＊研修日の１週間前まで） ②各園は、大平小学校（研修担当事務局校）へ、実施日・参加者を報告する（様式あり） ③各園は、担当小学校へ、研修当日の流れ（日案などの写し等）を送付する
研修連携園小学校 ◇受入れ園	Aブロック ◇認定こども園ひかり幼稚園・白石一小・小原小 ◇認可保育所あそびの森・白石一小 ※白石一小は２ ◇大鷹沢保育園・大鷹沢小 ◇白川保育園・白川小 Bブロック ◇第二幼稚園・白石二小・（白石一小） ※白石二小は３ ◇白石はるかぜ保育園・白石二小 ◇南保育園・白石二小・大平小 ◇越河保育園・越河小 Cブロック ◇北保育園・福岡小 ◇白石みのり保育園・深谷小



白石市幼保小の架け橋プログラム

2 小学校体験研修 （年２回、各園保育士・教諭等が、各小学校で一日体験を行う）

目的	4月	幼稚園、保育園の担当者が、卒園児の小学校での生活の様子を参観・支援を体験し、小学校教育の内容や小学校１年生の実態を把握することにより、その後の保育の参考とする。入学後、安心して自己発揮できるような環境の構成について情報提供を行う。
	１１月	幼稚園、保育園の担当者が、卒園児の小学校での成長の姿や生活科等の授業を参観・支援し、架け橋期のカリキュラムや今後の交流のねらいや流れ等について小学校教員と情報交換を行う機会とする。
対象者	○主として５歳児の担任等 ○小学校体験研修を希望する者（前年度５歳児の担任等がいる場合は、対象とする）	
実施期間	4月	４月の第４週の期間に（各園から１～２名）
	１１月	１１月の第４週～第５週の期間に（各園から１～２名）
時間	８：１０～１４：４０を原則とする ＊受け入れる小学校で調整を行うことは可能とする ただし、児童下校後の情報交換の時間を十分に確保できる計画とする	
内容	○授業参観、読み聞かせや手遊び等の TT による活動 ○スタートカリキュラムの実践参観（４月） ○生活科の授業参観（１１月） ○探究の対話（p4c）を取り入れた授業 ○小学校職員との話合い・情報交換 【取り上げたい内容】 ①スタートカリキュラムや生活科の授業について ②子供の姿について（育っている力なども） ③小学校での環境の構成について ④接続期に意識していることについて ⑤交流活動前後の子供の様子について	
留意点	・研修日の前までに、週案等当日の指導計画を体験者（園）に配布する ・読み聞かせや手遊びなどを TI で担当してもらう時間を設定する ・時間割に１時間は生活科の授業を設定する	
研修報告書	・各園からの参加者は研修報告書を作成し、「校務系共有フォルダ」に保存する 「校務系共有フォルダ」→ 共有→ 幼保小架け橋プログラム→ 研修へ保存	

研修日設定等	①小学校が、担当園と期日を調整し、研修日を決定する （＊研修日の１週間前まで） ②各小学校は、大平小学校（研修担当事務局校）へ、実施日・参加者を報告する（様式あり）

白石市幼保小の架け橋プログラム

3 体験研修実施後の合同研修会 （年４回、ブロックごとに体験研修の話合いを行う）

目的	4月	・各園、各小学校の関係者で顔合わせの機会とする ○小学校１年生の姿について互いに率直に思いを話す場とする ○スタートカリキュラムについて、共有しておきたいことを話し合う ○次回の小学校体験（１１月）に向けての希望や改善点等について確認する
	7月	○主として5歳児の姿について、遊びを通しての総合的な指導について、育っている姿についてなど、互いに率直に思いを話す場とする ○アプローチ期のカリキュラムについて、共有しておきたいことを話し合う ○次回の保育体験（１月）に向けての希望や改善点等について確認する
	１１月	○入学から半年以上経過した１年生の学びの姿、育っている力について話題とする ○幼児教育での学び（経験）が、生活科を中心に学びにつながっていると感じたことを話題とする ○交流計画や進め方について情報提供、交換を行う
	１月	○7月からの成長の姿を話題とする ○交流活動を通して互いに感じていることを話題とする（交流後の子供の姿や活動） ○入学に向けての園での取組や小学校への思いを話し合う
対象者	○各園・各小学校体験研修の参加者 ○受け入れ園・受け入れ小学校の担当者、受け入れたクラス（組）の担任 ○各ブロック長及びブロック長以外の小学校からは、校長または教頭 ○園長、校長が推薦する者	
実施期日	○ブロック内の受け入れ先で体験研修が全て終了してから行う （ただし、感染症等により実施を延期した場合は、それを待たずに開催する） ＊３ブロック間で、あまり開きがないように調整する ○開催日、時間、会場については、ブロック長の小学校で調整する	
内容	①受け入れ園・小学校で事後に話し合った内容について（子供の姿も含む） ②「環境の構成」の工夫と援助、教師の関わりについて ③受け入れ校・受け入れ園から子供の姿、保育士・教師等の変容について ④今後の体験研修に向けての希望など ⑤架け橋期の全体カリキュラムについて（改善したい項目、内容など）	
留意点	・各ブロックで話題となった内容はブロックごとにまとめ、データを「校務系共有フォルダ」に保存する（架け橋プログラム運営会議の際の資料とする） 「校務系共有フォルダ」→ 共有→ 幼保小架け橋プログラム→ 研修へ保存	

研修日設定等の流れ	①ブロック長となっている小学校が、期日、会場を調整し、合同研修日を決定する ②各ブロック長は、大平小学校（研修担当事務局校）へ開催期日を報告する	
Aブロック	認定こども園ひかり幼稚園 認可保育所あそびの森 大鷹沢保育園 白川保育園	※白川小学校（ブロック長） 白石第一小学校 大鷹沢小学校 ＊東中学校
Bブロック	第二幼稚園 白石はるかぜ保育園 南保育園 越河保育園	※越河小学校（ブロック長） 白石第二小学校 大平小学校 小原小学校 ＊白石中学校 ＊小原中学校
Cブロック	白石みのり保育園 北保育園	※深谷小学校（ブロック長） 福岡小学校 ＊福岡中学校

【保育体験研修】
【小学校体験研修】
【体験研修実施後の合同研修会】
の要項を作成し配布した。

「目的」「対象者」「実施期間」「時間」「内容」「留意点」を明記し、各施設での対応に大きな差が出ないようした。

また、「研修日設定の流れ」も明記し、就学前施設と小学校間でどちらが主体となって調整を図るのかを確認できるようにした。

要項は運営会議や園長会、校長会の資料としても活用した。

４－２．架け橋期のカリキュラムの概要

１　架け橋期のカリキュラム

（1）架け橋期の全体計画の作成（５歳児４月～３月、小学校１年生４月～３月）

・「目指す子供の姿」
・「ねらい」
・「育みたい力」
・「共通して取り組みたい活動」（５歳児）
・「生活科を中心とした活動・単元デザイン」（小学校１年生）
・「環境の構成及び援助・配慮事項」
・「家庭との連携」
・「幼保小職員の交流・研修等」　を可視化した。

本市の基本モデルとして運営会議メンバーを中心に作成した。ねらいや育みたい力は、インクルーシブの視点を大切にした表現で作成した。

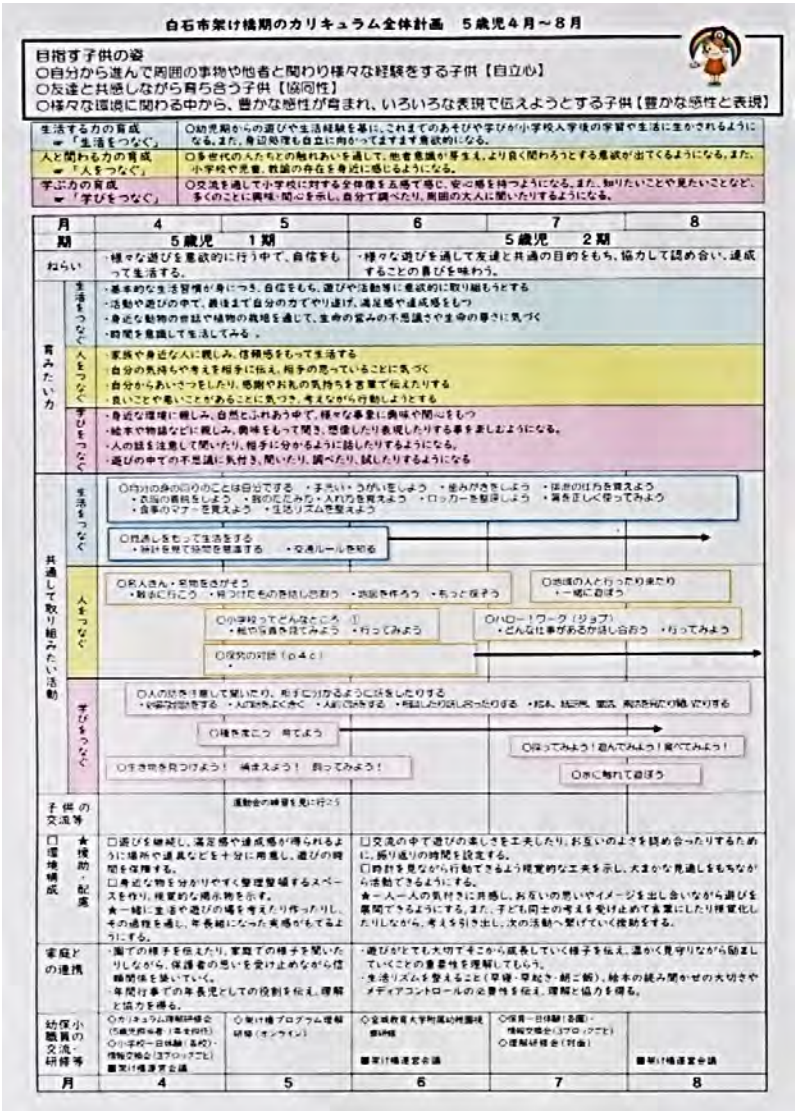
【５歳児の全体計画】
４月～８月

・目指す子供の姿は、３つの中学校区で話し合い自立心、協同性、豊かな感性と表現の視点を特に重視することにした。

・生活、人、学ぶの３つのつなぐを共通の視点として示し、「共通して取り組みたい活動」には先に作成した、いわゆるアプローチカリキュラムの活動を示した。

・「ｐ４ｃ」の取組を全体計画に位置付けた。

※「p4c」
参加者とファシリテーターが円座になり、毛糸で作ったコミュニティボールを使って対話しながら考えを深める活動。



【小学校１年生の全体計画】
４月～７月

・共通の視点として、育みたい力は、生活をつなぐ、人をつなぐ、学びをつなぐの３つの視点で作成。

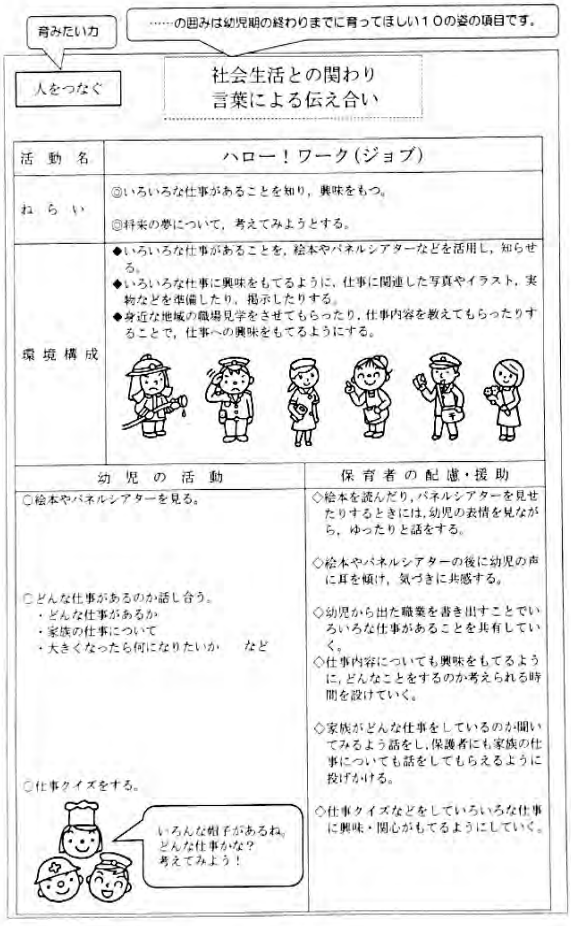
・「生活科を中心とした活動・単元デザイン」には、生活科の単元名を示し、スタートカリキュラムで作成した。「単元デザイン」を参照、活用できるようにした。
・「単元デザイン、幼児期の経験やつながり」のポイントを明記した。
※「単元デザイン」はスタートカリキュラムを活用する。

・「環境の構成、援助・配慮」事項は、幼保担当者の声も反映させて作成した。

(2) アプローチカリキュラム（市基本モデル）の作成　（＊はじめは暫定版として提案）
架け橋プログラム事業についての理解を深めること、既存の接続カリキュラムを架け橋期の２年間にアップグレードすることが協議された。「生活をつなぐ」「人をつなぐ」「学びをつなぐ」という３つの視点を軸に、幼児期からの育ちのつながりを意識して内容を整理することとした。
カリキュラムの具体的な構成や内容については、市内の各園と各小学校の運営委員を中心にした編成会議で検討を重ね、協働により新たなカリキュラムの作成に取り組んだ。作成にはアドバイザーとして開発会議委員の佐藤教授に参加していただいた。

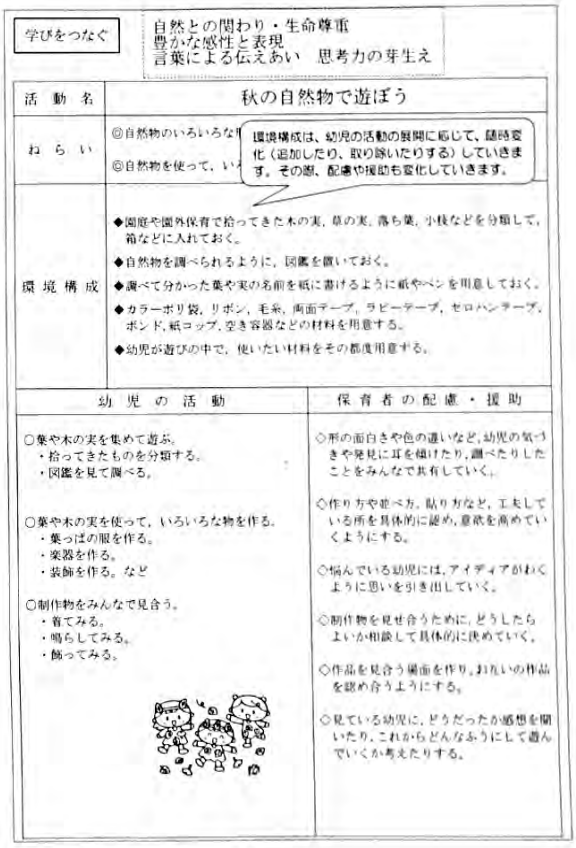
「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を意識しながら具体的な姿をイメージして話し合いを重ね、いわゆるアプローチカリキュラム（暫定版）を５歳児の４月から３月までに取り組める活動に拡大した。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と関連させながら、５歳児に身に付けさせたい生活習慣や態度・能力などをねらいに掲げ、どの園でもすぐに実践できるように指導案形式で作成した。

【アプローチカリキュラムの例】


育みたい力
……の囲みは幼児期の終わりまでに育ってほしい１０の姿の項目です。
人をつなぐ
社会生活との関わり
言葉による伝え合い

活動名	ハロー！ワーク（ジョブ）
ねらい	◎いろいろな仕事があることを知り，興味をもつ。 ◎将来の夢について，考えてみようとする。
環境構成	◆いろいろな仕事があることを，絵本やパネルシアターなどを活用し，知らせる。 ◆いろいろな仕事に興味をもてるように，仕事に関連した写真やイラスト，実物などを準備したり，掲示したりする。 ◆身近な地域の職場見学をさせてもらったり，仕事内容を教えてもらったりすることで，仕事への興味をもてるようにする。

幼児の活動	保育者の配慮・援助
○絵本やパネルシアターを見る。	◇絵本を読んだり，パネルシアターを見せたりするときには，幼児の表情を見ながら，ゆったりと話をする。
○どんな仕事があるのか話し合う。 ・どんな仕事があるか ・家族の仕事について ・大きくなったら何になりたいか　など	◇絵本やパネルシアターの後に幼児の声に耳を傾け，気づきに共感する。 ◇幼児から出た職業を書き出すことでいろいろな仕事があることを共有していく。 ◇仕事内容についても興味をもてるように，どんなことをするのか考えられる時間を設けていく。 ◇家族がどんな仕事をしているのか聞いてみるよう話をし，保護者にも家族の仕事についても話をしてもらえるように投げかける。
○仕事クイズをする。 いろんな帽子があるね。どんな仕事かな？考えてみよう！	◇仕事クイズなどをしていろいろな仕事に興味・関心がもてるようにしていく。


学びをつなぐ
自然との関わり・生命尊重
豊かな感性と表現
言葉による伝えあい　思考力の芽生え

活動名	秋の自然物で遊ぼう
ねらい	◎自然物のいろいろな ◎自然物を使って，い
環境構成	◆園庭や園外保育で拾ってきた木の実，草の実，落ち葉，小枝などを分類して，箱などに入れておく。 ◆自然物を調べられるように，図鑑を置いておく。 ◆調べて分かった葉や実の名前を紙に書けるように紙やペンを用意しておく。 ◆カラーポリ袋，リボン，毛糸，両面テープ，ラビーテープ，セロハンテープ，ボンド，紙コップ，空き容器などの材料を用意する。 ◆幼児が遊びの中で，使いたい材料をその都度用意する。

環境構成は、幼児の活動の展開に応じて、随時変化（追加したり、取り除いたりする）していきます。その際、配慮や援助も変化していきます。

幼児の活動	保育者の配慮・援助
○葉や木の実を集めて遊ぶ。 ・拾ってきたものを分類する。 ・図鑑を見て調べる。	◇形の面白さや色の違いなど，幼児の気づきや発見に耳を傾けたり，調べたりしたことをみんなで共有していく。
○葉や木の実を使って，いろいろな物を作る。 ・葉っぱの服を作る。 ・楽器を作る。 ・装飾を作る。など	◇作り方や並べ方，貼り方など，工夫している所を具体的に認め，意欲を高めていくようにする。
○制作物をみんなで見合う。 ・着てみる。 ・鳴らしてみる。 ・飾ってみる。	◇悩んでいる幼児には，アイディアがわくように思いを引き出していく。 ◇制作物を見せ合うために，どうしたらよいか相談して具体的に決めていく。 ◇作品を見合う場面を作り，お互いの作品を認め合うようにする。 ◇見ている幼児に，どうだったか感想を聞いたり，これからどんなふうにして遊んでいくか考えたりする。

アプローチカリキュラムは、架け橋期の共通する視点である、「生活をつなぐ」「人をつなぐ」「学びをつなぐ」の３つの視点で活動を構成するとともに、子供の活動意欲を引き出す「環境の構成」例についても詳しく掲載し、担任が実践内容を具体的にイメージしやすいよう工夫した。

(3) スタートカリキュラム（市基本モデル）の作成（＊はじめは暫定版として提案）

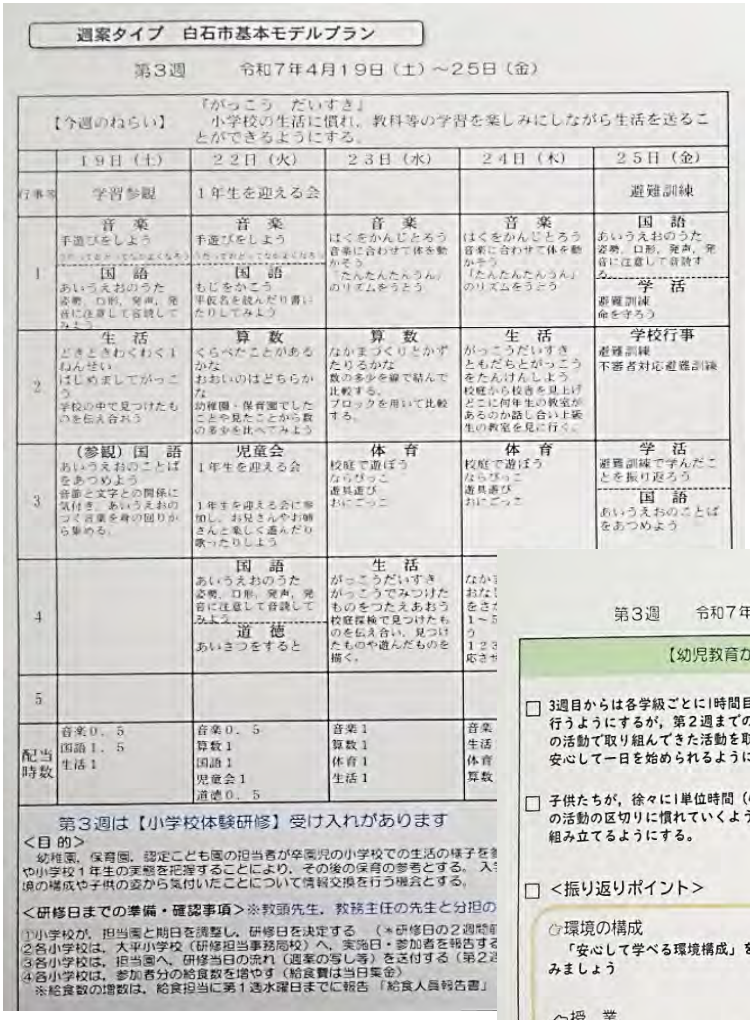
１年生担任等（教務主任等も含む）代表メンバーは、それを受けて週案タイプのスタートカリキュラムを作成し、併せて生活科を中心とした単元デザインを作成し、その中に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」とのつながりを入れた。

・週案タイプ（５月上旬まで）
・生活科中心の単元デザイン（４月から３月までの単元構成）
・単元デザインに関連する「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」とのつながり

を小学校の運営委員が中心となって作成した。
２年生の生活科を中心とした単元デザインも作成した。

【週案タイプ】

・週案タイプは園で行ってきた手遊びや歌を活動に取り入れるなどの工夫を加えるとともに、４月は滑らかな接続を意識した合科的・関連的な指導が行えるように提案した週案形式を作成した。



週案タイプ　白石市基本モデルプラン

第３週　　令和７年４月１９日（土）～２５日（金）

【今週のねらい】　「がっこう　だいすき」
小学校の生活に慣れ，教科等の学習を楽しみにしながら生活を送ることができるようにする。

	１９日（土）	２２日（火）	２３日（水）	２４日（木）	２５日（金）
行事等	学習参観	１年生を迎える会			避難訓練
1	音　楽 手遊びをしよう 国　語 あいうえおのうた 姿勢，口形，発声，発音に注意して音読してみよう。	音　楽 手遊びをしよう 国　語 もじをかこう 平仮名を読んだり書いたりしてみよう	音　楽 はくをかんじとろう 音楽に合わせて体を動かそう 「たんたんたんうん」のリズムをうとう	音　楽 はくをかんじとろう 音楽に合わせて体を動かそう 「たんたんたんうん」のリズムをうとう	国　語 あいうえおのうた 姿勢，口形，発声，発音に注意して音読する。 学　活 避難訓練 命を守ろう
2	生　活 どきどきわくわく１ねんせい はじめましてがっこう 学校の中で見つけたものを伝え合おう	算　数 くらべたことがあるかな おおいのはどちらかな 幼稚園・保育園でしたことや見たことから数の多少を比べてみよう	算　数 なかまづくりとかずだりるかな 数の多少を線で結んで比較する。 ブロックを用いて比較する。	生　活 がっこうだいすき ともだちとがっこうをたんけんしよう 校庭から校舎を見上げどこに何年生の教室があるのか話し合い上級生の教室を見に行く。	学校行事 避難訓練 不審者対応避難訓練
3	（参観）国　語 あいうえおのことばをあつめよう 音節と文字との関係に気付き，あいうえおのつく言葉を身の回りから集める。	児童会 １年生を迎える会 １年生を迎える会に参加し，お兄さんやお姉さんと楽しく遊んだり歌ったりしよう	体　育 校庭で遊ぼう ならびっこ 遊具遊び おにごっこ	体　育 校庭で遊ぼう ならびっこ 遊具遊び おにごっこ	学　活 避難訓練で学んだことを振り返ろう 国　語 あいうえおのことばをあつめよう
4		国　語 あいうえおのうた 姿勢，口形，発声，発音に注意して音読してみよう。 道　徳 あいさつをすると	生　活 がっこうだいすき がっこうでみつけたものをつたえあおう 校庭探検で見つけたものを伝え合い，見つけたものや遊んだものを描く。		
5					
配当時数	音楽０．５ 国語１．５ 生活１	音楽０．５ 算数１ 国語１ 児童会１ 道徳０．５	音楽１ 算数１ 体育１ 生活１	音楽 生活 体育 算数	

第３週は【小学校体験研修】受け入れがあります

＜目　的＞
幼稚園，保育園，認定こども園の担当者が卒園児の小学校での生活の様子を参観や小学校１年生の実態を把握することにより，その後の保育の参考とする。入学児童の構成や子供の姿から気付いたことについて情報交換を行う機会とする。

＜研修日までの準備・確認事項＞※教頭先生，教務主任の先生と分担の

①小学校が，担当園と期日を調整し，研修日を決定する　（＊研修日の２週間前
②各小学校は，大平小学校（研修担当事務局校）へ，実施日・参加者を報告する
③各小学校は，担当園へ，研修当日の流れ（週案の写し等）を送付する（第２週
④各小学校は，参加者分の給食数を増やす（給食費は当日集金）
※給食数の増数は，給食担当に第１週水曜日までに報告「給食人員報告書」

・週案では時数カウントの目安として教科等の時間を区切っているが、実際は活動を区切らずに子供たちの思いを拾い上げながら活動をつないでいくことを第１週には明記している。

白石市基本モデル

第３週　　令和７年４月１９日（土）～２５日（金）

【幼児教育からの接続を踏まえたチェックポイント】

☐ 3週目からは各学級ごとに1時間目の学習を行うようにするが，第２週までの1時間目の活動で取り組んできた活動を取り入れ，安心して一日を始められるようにする。

☐ 子供たちが，徐々に1単位時間（45分間）の活動の区切りに慣れていくように授業を組み立てるようにする。

☐ ＜振り返りポイント＞

☞環境の構成
「安心して学べる環境構成」を見直してみましょう

☞授　業
「今までに見たことあるかな？」「園でやったことあるかな？」など幼児期の経験を子供から引き出しながら授業を進めていますか？」

☐ （学習環境への配慮）
身体計測後は，身長や視力，聴力などを考慮した座席に変更していく。

☐ 【小学校体験研修】園の先生方との情報交換では気にかけていることや学習の進め方などについて話し合う場とする。

【情報交換で取り上げたい内容】
①スタートカリキュラムについて
②子供の姿について
③小学校での環境の構成について
④幼児教育からの接続で意識していることについて

詳しくは，白石市幼保小の架け橋プログラム研修会要項　『２ 小学校体験研修』を確認する。

生活科「がっこうだいすき」の準備

学校探検は，1年生が入学して初めて学校生活の主人公としてデビューする，ワクワク・ドキドキの単元です。スタートカリキュラムとして，小学校の学びへと橋渡しをしていく単元としても考えることができます。

学びを豊かにするポイント

思いや願いを生かした学習活動を構成する

生活の中で見付けた疑問を解決したり，子供の思いや願いを実現したりすることで学ぶことへの意欲を高めていきます。そのためにも，子供のつぶやきを大切にして，子供の意識の流れに沿った学校探検の計画を立てて実践しましょう。

体験をきっかけにして各教科等につなげる

学校探検を通して，見付けたり，遊んだり，不思議だなと感じたり，やってみたいなと思ったりしたことが，「話したい」，「伝えたい」という気持ちにつながります。それは，例えば国語科における「話す・聞く」の学習活動などの動機付けとなり，格好の学習材となります。

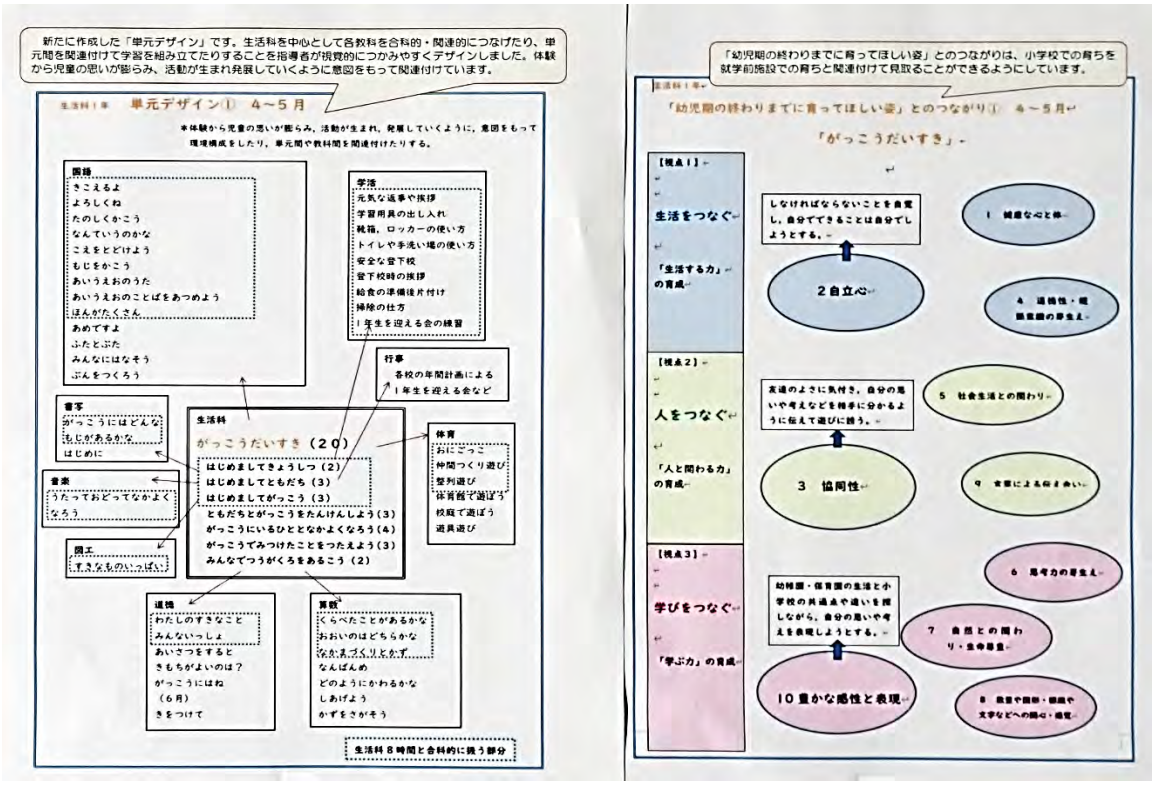
生活上必要な習慣や技能が身に付くように指導する

学校の公共性に意識を向けることで，学校の施設はみんなのものであること，学校にはみんなで気持ちよく生活するための決まりやマナーがあることなどに気付いたり，学校生活のリズムを身に付けたりすることができるように指導することが大切です。

（出典）「必携！スタートカリキュラムスタートブック」（平成２７年１月 文部科学省　国立教育政策研究所　教育課程研究センター）から抜粋

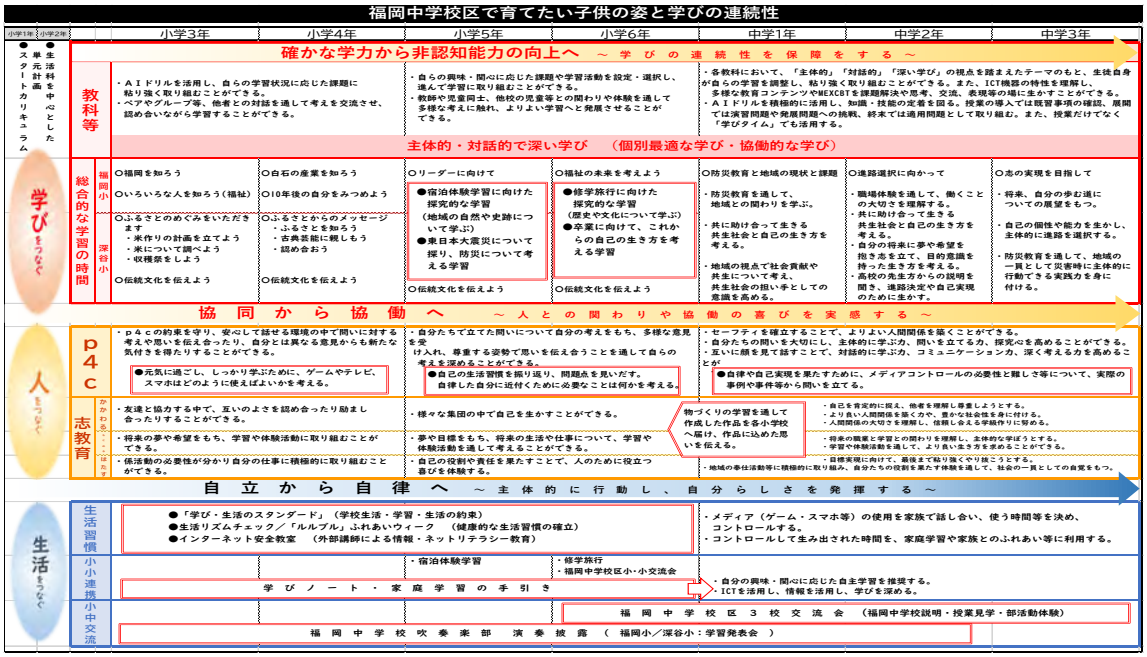
・見開きの右頁には、【幼児教育からの接続を踏まえたチェックポイント】を作成し、１年生の担任がゼロから指導をスタートさせるのではなく、園での育ちを生かした指導を意識できるようにした。

【単元デザイン】及び【幼児期の終わりまでに育ってほしい姿】とのつながり



さらに１年生の生活科については、新たに月次の「単元デザイン」を作成し生活科の単元が他教科や幼児期からの育ちとどのように関わっているのかについて可視化できるよう工夫した。１年生担任が初めてでも、合科的・関連的な指導の計画を行う際、利用できるものとして作成した。令和５年度には２年生の生活科についても「単元デザイン」を作成し、より長い期間で学びの連続性を意識した指導が行えるようにした。

⑷　学びの連続性の全体構想図（小学校３年生から中学校３年生まで）の作成



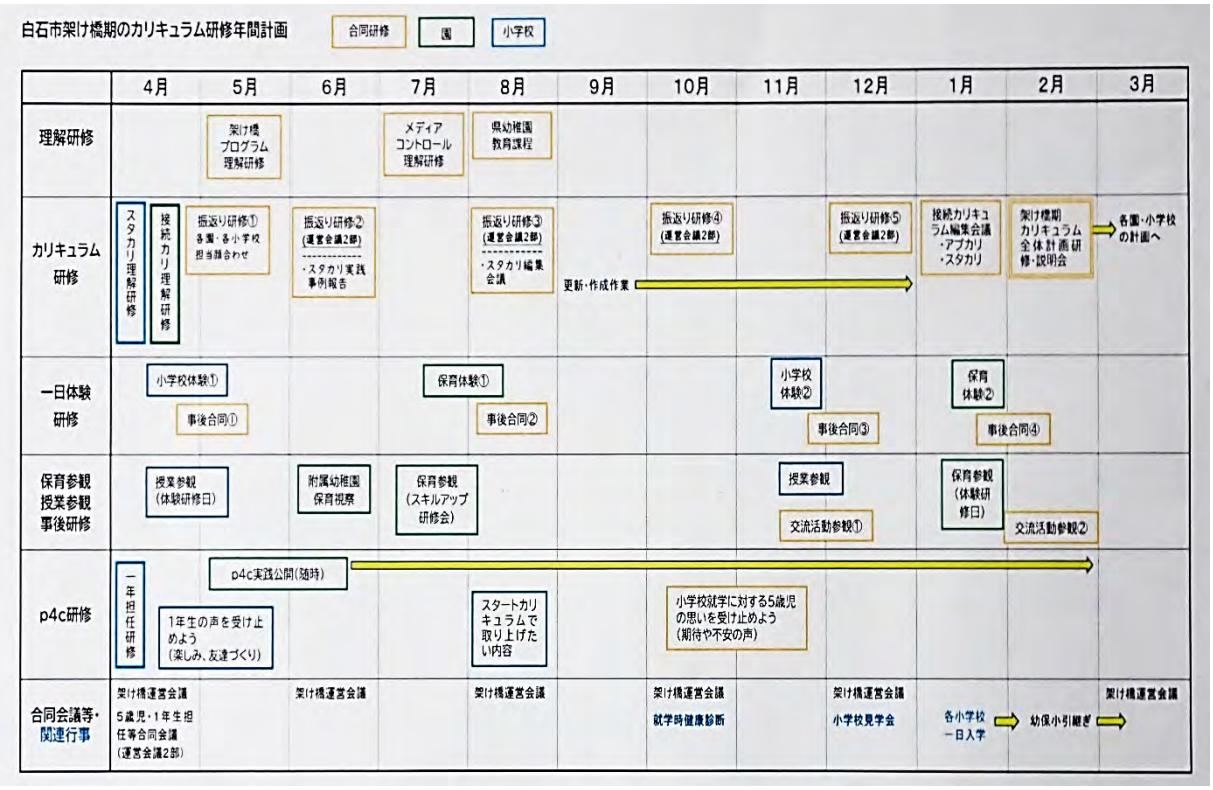
【小中連携の全体構想（福岡中学校区）】

中学校までの学びの連続性を意識した取組を行うため、「小中連携の全体構想」を作成した。作成に当たっては福岡中学校区をモデル地区とし、各学校の担当者を中心にして、これまで行ってきた「志教育」や「総合的な学習の時間」等における小中連携の取組について整理した。また、それらの取組を「学びをつなぐ」「人をつなぐ」「生活をつなぐ」の３つの視点と関連させながら１枚の表にまとめることで小中学校での学びの連続性が一覧できるようにした。

(5) 各種研修・合同会議の年間計画の作成

カリキュラムを実践していく中で、実践事例の振り返りやカリキュラムの検証をするために見通しをもつことができるように研修計画を可視化することにした。架け橋期の全体計画に反映させたかったが、紙面上の都合で一覧にはできなかったため別に作成することになった。

【研修年間計画】A3 横で作成



６年度の２月に「架け橋期のカリキュラム」に係る全体計画、研修計画について教育委員会事務局から説明を行った。

次年度の架け橋プログラムの取組について理解してもらうことと、各園、各校の教育課程（教育計画）への資料として活用を図ってもらうことを共有する目的で実施した。その際の資料として「架け橋期の全体計画」と「架け橋期の研修年間計画」を活用した。

４－３．架け橋期のカリキュラムの実践

１　一日体験研修・事後合同研修の実践

【一日保育体験研修】

令和４年度の１月に最初の研修を市内一斉に実施した。令和５年度は夏休みと１月末の２回実施した。各小学校の運営委員、１年担任などが保育園や幼稚園の５歳児クラスで体験する研修である。夏休みの研修では各学校２～３名の教員が体験研修に参加した。

【創作活動】

【昼寝の時間】

【招待状紹介】

【一日小学校体験研修】

入学直後の４月と１１月の２回、保育士や幼稚園教諭が小学１年生のクラスで体験する研修である。

保育士や幼稚園教諭に児童と接する機会として「読み聞かせ」をする時間などを体験の中に設定した。２回の体験研修を同じ保育士が参加することにより、児童の変容を見取れるようにした。

【読み聞かせ】

【給食準備の様子】

【保育士の授業支援】

【事後合同研修会】

それぞれの体験研修の終了後に、３つのブロックごとに情報交換会を行っている。

体験することによって互いの思いや保育・授業の様子を知り、今後の実践につなげていくことができた。

幼稚園・保育園と小学校の連携だけでなく、小学校同士の関係も生まれ１年担任の授業を他の学校の１年担任が参観し研修することができた。

【事後研修での話合い】

＜課題＞

・研修報告書や研修後の合同研修から幼児教育でやってほしいことなどを希望する内容があった。指導主事が助言したり運営会議で話題にしたりして具体的な事例から前倒しではないことを学ぶ機会としている。

・１年目の研修では、各施設によって研修時間や情報交換の内容に乖離があった。特に小学校は午後に会議等を設定していない日を研修日として調整することが必要であった。そのことから研修要項を作成し、情報交換の内容や、事後の合同研修で協議したい内容を市全体で確認できるようにした。

【一日体験研修をまとめた資料の一部】

・開発会議及び運営会議用の資料を各園、各校にもデータを配信して共有を図るようにした。

２　就学前施設（園）での実践　（実践事例を検証し、カリキュラムの改善・更新をする）
　　アプローチカリキュラム（暫定版）を中心とした実践

＜課題＞

・暫定版を実践例から検証し、改善していかなければならないこと。

・モデルどおりにやらなければいけないという５歳児担当者の思いがあったこと。

⇒　子供の姿に応じて園で柔軟な実践を行い、情報交換をしながら検討・改善・更新をしていくことを話し合う。

＜開発会議での協議から＞

(1) 各園の実践者が、「環境の構成」「配慮・援助」を実態に応じて変えてよいこと

(2) 園での実践内容を、「幼児の活動」として入れると活用しやすくなる
　　実践した内容を「幼児の活動」としてまとめてみることに

・実際に、５歳児担任が作成した資料

・環境の構成や保育者の配慮・援助を自園での取組に変えて作成

・幼児の活動をドキュメンテーションで作成

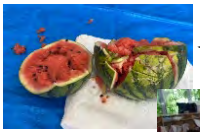
活　動　名	採ってみよう！遊んでみよう！食べてみよう！
ね　ら　い	◎畑やプランターの野菜に興味をもち，喜んで収穫する。 ◎収穫した野菜の形や色，感触の違いに気づく。 ◎自分たちで採った野菜を食べてみようとする。
◆環境構成 ◇保育者の配慮・援助	**〈採ってみよう！〉** ◆野菜の収穫に必要なハサミ，カゴなどを用意しておく。 ◆野菜をスタンプあそびに使用する分と食べる分に分ける。 ◇安全に十分注意しながら，ハサミや手で収穫する方法を知らせる。 ◇色や形の違いなど，幼児の気づきや発見に共感していく。 ◇野菜の数え方は、子どもの発達や興味関心によって工夫する。 **〈遊んでみよう！〉** ◆画用紙，スタンプ台，絵の具などスタンプあそびに必要な材料を用意しておく。 ◆子ども達が自由に手に取って遊べるように必要な道具を用意する。 （すりおろし器，泡だて器，計量カップ，グラス，すり鉢，すり棒，石鹸等） ◇切った野菜の感触や，切り口の形の違いなど，幼児の発見に共感しながらスタンプあそびが楽しめるようにしていく。 ◇様々な形からどんなものが作れるか，思いや考えに共感しながら，形を組み合わせることを楽しめるようにしていく。 **〈食べてみよう！〉** ◆目の前で調理する様子が見えるようにしたり，どの料理に採った野菜が使われたかを分かりやすいようにしたりする。 ◇自分で収穫した野菜を食べる事への喜びが，もてるような声掛けなどをしていく。 ◇幼児が感じたことや食べた感想などを聞き，楽しい雰囲気の中で食べることができるようにする。

幼　児　の　活　動

○野菜の収穫をする。
・ハサミで切ったり，直接手でもいだりしながら収穫する。
・採れた野菜を数えたり，五感を使い観察したりする。

○野菜スタンプあそびをした後に構成遊びをする。
・野菜を包丁で切り，縦と横の断面の違いを観察する。
・切られた野菜に絵の具を付けてスタンプをする。
・スタンプあそびでできた形を組み合わせて構成あそびを行い，できた作品を発表する。

○スイカ割りをする。
・友達と一緒にスイカ割りのルールを決める。
・割ったスイカを使い，ジュース屋さんごっこや色水遊びをする。



○収穫した野菜を食べる
・給食で出してもらい，友達と一緒に食べる。
・園で調理できない場合は家に持ち帰る。

・実践したことを写真を入れてまとめることで誰もがイメージしやすくなり、振り返りや参考にできる資料となった。

＜アプローチカリキュラム「実践資料集」の作成へ＞

　開発会議において、「幼児の活動」が入ったことにより大変分かりやすく参考になるとの評価を受け、実践例を資料集として作成する方向とした。
　はじめに作成したアプローチカリキュラム（暫定版）は、形式は変更せずに市の基本モデルとして参考資料として活用することとした。
　「実践資料集」については、「５－２　教材等の作成」で報告している。

３　小学校での実践（実践事例を検証し、カリキュラムの改善・更新をする）
　　スタートカリキュラムの実践
＜課題＞
・入学後の翌日から学校生活に適応させたい教師の思いが優先して教師の説明が多いと感じる１年生の声があったこと。（就学前施設に出向いた時に話したこと）
・合科的・関連的な指導計画の生かし方が十分ではなく、早い時期から教科書にそって教師が主導する授業が行われたこと。

＜課題への対応＞
・協力校１年生の授業の様子を参観する機会を設けることにした。参観を希望する１年生担任が入学後の活動や授業の展開について参考となるようにした。
・実践を振り返る会で実践例をワンペーパーにまとめ情報交換を行った。

(1)　４月の実践の振り返り
　振り返りの会で使用した小学校１年生の実践事例の資料の一部である。

４月・５月の実践については、各教科等で幼児教育での経験を問いかけたり、関連付けて考えたりする授業展開について１年生担任等が各小学校での取組を話し合った。

日々の生活場面では・・・

★活動内容の提示★

活動の流れを絵カードと文字で示す。
【例】朝の支度、一日の流れや授業の流れなど

★学習活動につながるものの提示★

入学した時からこの時計を教室に置いている。「長い針が６までね。」などと声を掛けていたが、「長い針が６ってことは、30 分ってことでしょ。」「半っても言うよ。」など、園やこれまでの経験を子供たち同士で話す姿が見られた。

★視覚的な支援★

昨年度の情報交換の際に、他校の先生から教えていただいたことを真似してみました(^^♪

動きを矢印で示す。
【例】ぞうきんのかけ方
※福岡小学校では、ワイパー掛けという方法でぞうきんをしている。今年は動きを矢印で示したところ、手順を覚え、６年生のお手伝いがなくとも、１年生のみで掃除ができるようになった。

★係活動への達成感を持たせる工夫★

顔写真で役割を掲示し、その日の活動が終わったら札を裏返す。すべての活動が終わると、裏面の絵が完成する仕組みで、子供たちは喜んで自分の役割に取り組むことができた。

この資料は、２年間続けて１年生担任となった教師の作成資料である。スタートカリキュラムを基に１年間の経験を積んで工夫した点を簡潔に分かりやすくまとめたものである。

⑵ ドキュメンテーションを活用した実践と振り返り

協力校の１年生担任が幼児教育で行われている「ドキュメンテーション」を取り入れた生活科の授業を提供した。学習環境整備の一つとして「ドキュメンテーション」を児童がいつも見ることができるようにした事例を話し合った。

ドキュメンテーションの活用例として、２年生とのコラボレーションによる生活科の授業で活用したことをまとめた資料の一部である。ドキュメンテーションを見ながら振り返りや説明に活用できる効果について学び合うことができた。

この実践例を資料として次年度の１・２年生の担任等へ引き継ぐことで、教材研究の参考資料にもなり次年度の指導の充実を図るとともに、架け橋期のカリキュラムの検討、改善へつなげていけるようにしていく。

３　５歳児担任等と小学校１年生担任等の合同研修の実践

【実践を振り返る会】

＜課題＞

・就学前施設の保育の様子と小学校の授業を市全体で見合う機会が少なくなっていた。体験研修の事後研修会では、実践事例まで話す時間は設けることができないこと。

・幼児教育が小学校にどう生かされるのかを互いに学ぶ機会が少ないこと。

＜課題への対応＞

・実践、検証の核となる５歳児担任等及び小学校１年生担任等が実践したカリキュラムの内容について話し合う機会を設定した。

・自分の園、校の実践を発表したり聞いたりすることで自身の保育、授業の振り返りができた。さらに、１ つの実践事例を通して「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」のどんなところが育まれているか、小学校の授業にどうつながっていくのかワークショップを行うことで共通理解が進んだ。

４　５歳児、１年生の交流の実践

＜課題＞

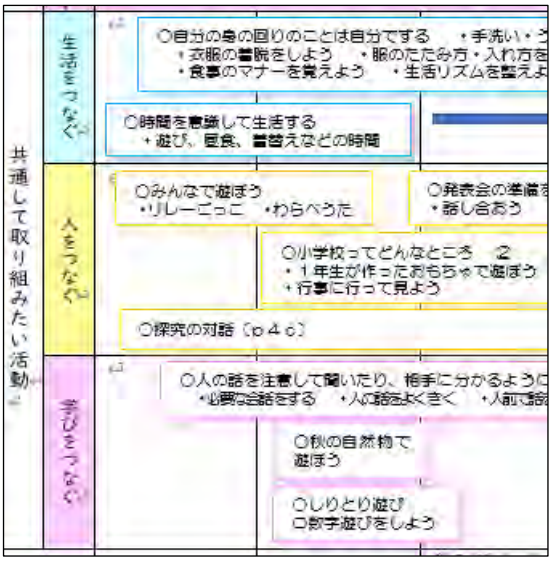
・幼保小間で交流活動が行われるようになったが、行事を通しての交流内容が多くなっていること。

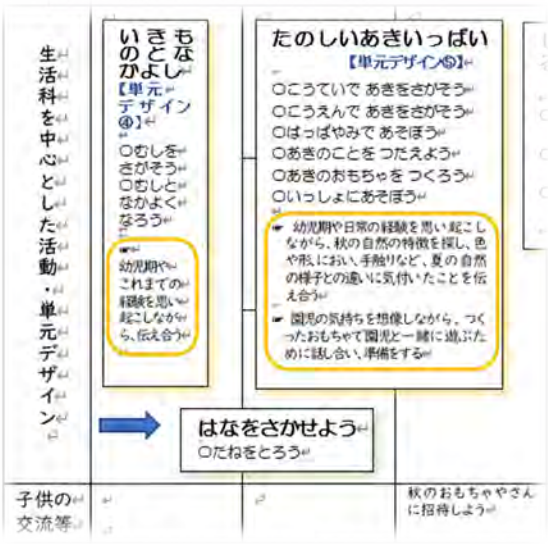
＜課題への対応＞

・協力園と協力校が、架け橋期の全体計画で関連のある活動についての実践を紹介した。

【保育園・小学校のコラボレーション】

○保育園	○小学校
・秋の自然物で遊ぼう	・たのしいあきいっぱい
・小学校ってどんなところ？	・もうすぐ２年生





⑴【単元を貫いた交流活動】

大平小１年生の生活科「たのしいあきいっぱい」の単元の活動と、南保育園「秋の自然物で遊ぼう」の活動で、２回の交流を行った。

１回目は、市中心部にある公園に集合し、一緒に落ち葉やどんぐりなどの木の実を拾ったり、自然物で遊んだりした。

２回目は、大平小の「あきのおもちゃやさん」に南保育園の子供たちを招待した。益岡公園で一緒に集めた自然物で、「どんぐりまといれ」「どんぐりつり・まつぼっくりつり」「どんぐりさがし」「どんぐりころころ」のお店を開き保育園の子供たちと一緒に楽しく遊ぶことができた。

⑵【活動のつながりを意識した交流活動】

・生活科「もうすぐ２年生」と国語「小学校ですることをしょうかいしよう」の単元で、南保育園の子供たちに小学校のことを紹介する交流を行った。

１年生の子供たちが、自分たちが入学前に心配だったことを話し合い、保育園の子供たちに何を教えてあげたいかを考えた。「勉強を見てみよう」「勉強をやってみよう」「学校を探検しよう」という活動に参加してもらい、保育園での「自分の名前を書いてみよう」「学校ごっこをしよう」の活動につなげていくことができた。

○　協力園・協力校での交流活動を参考として、５歳児と小学校１年生の交流活動を設定したり、小学校での交流体験を園で広げたりすることで、互いの活動が深く結び付いてきている。令和６年度（３年目）は、小学校からのアプローチにより市内全ての園が小学校との交流活動を行うことができた。

５　p4c の実践

＜課題＞

・自分の思いをなかなか伝えられない子供の声も拾い上げることが難しい。
・希望する就学前施設での取組であること。
・小学校１年生での実践が定着していないこと。

＜課題への対応＞

・p4c を計画的に実践している就学前施設が実践する日時を提供する。
・参観希望があった場合は、教育委員会で日時・施設を調整して対応する。
・１年生担任を対象とした研修を設定する。

・実践事例を作成し、指導者の質を向上させていく。

５．自治体の支援

５－１．研修の実施

＜実施した研修の概要＞

令和４年度

実施日	研修名	実施形式	対象者	研修内容
8 月 31 日	幼保小の架け橋プログラム研修	対面	公立幼保小からの代表者	架け橋プログラム事業の取組について
12 月 23 日	幼保小の架け橋プログラム手引き等研修	対面	公立幼保小の運営委員	架け橋プログラム事業に向けての手引き等の内容理解
3 月 20 日	幼保小の架け橋プログラム管理職等研修会	対面	市内全幼保小中の管理職及び代表１名	架け橋プログラムの推進に当たって （講演）宮城教育大学教授

令和５年度

実施日	研修名	実施形式	対象者	研修内容
4 月 4 日	スタートカリキュラム研修	対面	小学校１年生担任等	カリキュラム作成の趣旨と実践の留意点について
4 月 19 日	アプローチ期のカリキュラム研修	対面	５歳児担当者等	カリキュラム作成の趣旨と実践の留意点について
5 月 26 日	幼保小の架け橋プログラム理解研修	オンライン	市内全幼保小の職員	遊びと学びをつなぐ幼保小連携の在り方 （講演）宮城教育大学教授
8 月 7 日	白石市「幼保小の架け橋プログラム事業」研修会	対面	市内全幼保小中職員、県内希望者	架け橋プログラムによる幼保小の連携・学びの連続性 （講演）文部科学省調査官

令和６年度

実施日	研修名	実施形式	対象者	研修内容
4 月 3 日	架け橋期のカリキュラム研修（スタートカリキュラムを含む）	対面	小学校１年生担任等、５歳児担当者等	カリキュラム作成の趣旨と実践で共有したいことについて
4 月 17 日	架け橋期のカリキュラム研修（アプローチ期のカリキュラムを含む）	対面	５歳児担当者等、小学校１年生担任等	カリキュラム作成の趣旨と実践で共有したいことについて
6 月 12 日	幼保小の架け橋プログラム理解研修	オンライン	市内全幼保小の職員	架け橋プログラムの推進、遊びと学びをつなぐ幼保小連携・接続の在り方 （講演）宮城教育大学教授
6 月 24 日	宮城教育大学附属幼稚園視察研修	保育参観 対面	市内幼保職員希望者	附属幼稚園での保育参観と年齢別分科会での保育研修
7 月 31 日	白石市「幼保小の架け橋プログラム」理解研修会	対面	市内全幼保小中職員、県内希望者	架け橋プログラムによる幼保小の円滑な接続の推進と学びの連続性 （講演）文部科学省視学官

＜研修の成果と課題＞

＜成果＞

⑴ 「幼保小の架け橋プログラム」理解研修会

・幼保小の架け橋プログラムの理解研修を実施したことで、「幼保小の架け橋プログラム」の内容の理解や重要性の認識を図ることにつながった。

・架け橋期の担任等ではない保育士等や教師の理解を得ることにつながった。アンケートの結果からも、９７％を超える参加者が「理解が深まった」と回答している。また、互いの立場の理解や自身の指導の改善にもつながっていることが分かった。

・保育園等での５歳児の一日のスケジュールを知り、小学校と午前中の過ごし方が大きく違うことを多くの小学校教師が学んだことが成果である。入学後のスタートカリキュラムがなぜ必要であるのかを理解することにもつながった。

⑵ スタートカリキュラム・アプローチカリキュラム研修会

・架け橋期のカリキュラムの趣旨や内容、活用方法について直接担任等に説明することで理解を深めてもらい実践につなげてもらうことができた。

・担任として気負いや不安があったが、架け橋期に大切にしたい取組や指導方法等について学ぶことができて心が軽くなり前向きになることができた（受講者の感想）

・幼児教育アドバイザーの遊びをどんどん発展させていく子供の姿の話や、５歳児担任、小学校１年生担任を経験した方の思いを聞くことでイメージをもつことができ、不安が少なくなった。（受講者の感想）

⑶ 宮城教育大学附属幼稚園の視察研修会（本市単独での研修会）

・「環境の構成」を生かして遊ぶ子供の姿や遊びの経過や途中の出来ばえを見て、子供の説明や話をしっかりと聞いて肯定的に共感する保育者の姿勢が参考になった。

・遊びのあとの振り返りの時間は大変有効であると感じた。保育者が、毎日の振り返りの場面で、園児一人一人の思いや行動を把握していることが遊びの広がりや提案の素地になっていると感じた。（参加者の感想）

＜課題＞

⑴ スタートカリキュラム研修とアプローカリキュラム研修については、年度はじめの忙しい時期での開催となっている。時間を１時間３０分と決めて実施している。説明が長くならないように内容を工夫すること。また、初めて担任となる受講者の声を参考に内容を改善していくこと。

⑵ 附属幼稚園への視察研修に全ての就学前施設から参加してもらえるように施設長の思いや要望等を聞いて研修を実施すること。

５－２．教材等の作成

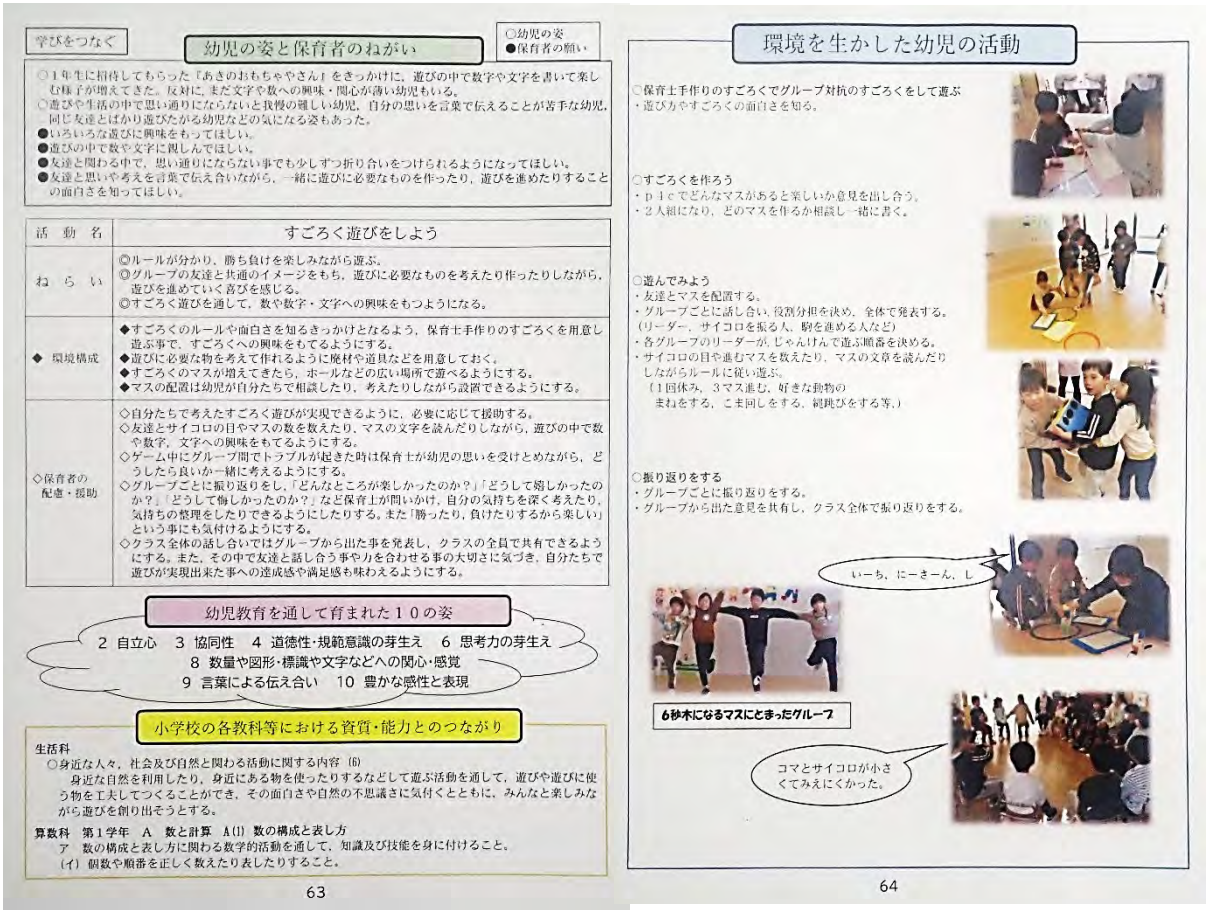
＜作成した教材等の概要＞

１　アプローチカリキュラム「実践資料集」の作成

開発会議で、「幼児の活動」が入ったことにより大変分かりやすく参考になるとの評価を受け、実践例を資料集として作成する方向とした。

「幼児教育と小学校教育がつながるってどういうこと」を参考にして、左ページには下段に「幼児教育を通して育まれた１０の姿」と「小学校の各教科等における資質・能力とのつながり」を入れた。

架け橋期のカリキュラム理解研修会や一日体験研修、合同研修会でも学びの連続性について参考とする資料として活用していく。



学びをつなぐ

幼児の姿と保育者のねがい

○幼児の姿
●保育者の願い

○１年生に招待してもらった『あきのおもちゃやさん』をきっかけに，遊びの中で数字や文字を書いて楽しむ様子が増えてきた。反対に，まだ文字や数への興味・関心が薄い幼児もいる。
○遊びや生活の中で思い通りにならないと我慢の難しい幼児，自分の思いを言葉で伝えることが苦手な幼児，同じ友達とばかり遊びたがる幼児などの気になる姿もあった。
●いろいろな遊びに興味をもってほしい。
●遊びの中で数や文字に親しんでほしい。
●友達と関わる中で，思い通りにならない事でも少しずつ折り合いをつけられるようになってほしい。
●友達と思いや考えを言葉で伝え合いながら，一緒に遊びに必要なものを作ったり，遊びを進めたりすることの面白さを知ってほしい。

活動名	すごろく遊びをしよう
ねらい	◎ルールが分かり，勝ち負けを楽しみながら遊ぶ。 ◎グループの友達と共通のイメージをもち，遊びに必要なものを考えたり作ったりしながら，遊びを進めていく喜びを感じる。 ◎すごろく遊びを通して，数や数字・文字への興味をもつようになる。
◆環境構成	◆すごろくのルールや面白さを知るきっかけとなるよう，保育士手作りのすごろくを用意し遊ぶ事で，すごろくへの興味をもてるようにする。 ◆遊びに必要な物を考えて作れるように廃材や道具などを用意しておく。 ◆すごろくのマスが増えてきたら，ホールなどの広い場所で遊べるようにする。 ◆マスの配置は幼児が自分たちで相談したり，考えたりしながら設置できるようにする。
◇保育者の配慮・援助	◇自分たちで考えたすごろく遊びが実現できるように，必要に応じて援助する。 ◇友達とサイコロの目やマスの数を数えたり，マスの文字を読んだりしながら，遊びの中で数や数字，文字への興味をもてるようにする。 ◇ゲーム中にグループ間でトラブルが起きた時は保育士が幼児の思いを受けとめながら，どうしたら良いか一緒に考えるようにする。 ◇グループごとに振り返りをし，「どんなところが楽しかったのか？」「どうして嬉しかったのか？」「どうして悔しかったのか？」など保育士が問いかけ，自分の気持ちを深く考えたり，気持ちの整理をしたりできるようにしたりする。また「勝ったり，負けたりするから楽しい」という事にも気付けるようにする。 ◇クラス全体の話し合いではグループから出た事を発表し，クラスの全員で共有できるようにする。また，その中で友達と話し合う事や力を合わせる事の大切さに気づき，自分たちで遊びが実現出来た事への達成感や満足感も味わえるようにする。

幼児教育を通して育まれた１０の姿

2 自立心　3 協同性　4 道徳性・規範意識の芽生え　6 思考力の芽生え
8 数量や図形・標識や文字などへの関心・感覚
9 言葉による伝え合い　10 豊かな感性と表現

小学校の各教科等における資質・能力とのつながり

生活科
○身近な人々，社会及び自然と関わる活動に関する内容（6）
身近な自然を利用したり，身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動を通して，遊びや遊びに使う物を工夫してつくることができ，その面白さや自然の不思議さに気付くとともに，みんなと楽しみながら遊びを創り出そうとする。

算数科　第１学年　A　数と計算　A(1) 数の構成と表し方
ア　数の構成と表し方に関わる数学的活動を通して，知識及び技能を身に付けること。
(イ) 個数や順番を正しく数えたり表したりすること。

63

環境を生かした幼児の活動

○保育士手作りのすごろくでグループ対抗のすごろくをして遊ぶ
・遊び方やすごろくの面白さを知る。

○すごろくを作ろう
・ｐ１ｃでどんなマスがあると楽しいか意見を出し合う。
・２人組になり，どのマスを作るか相談し一緒に書く。

○遊んでみよう
・友達とマスを配置する。
・グループごとに話し合い，役割分担を決め，全体で発表する。
（リーダー，サイコロを振る人，駒を進める人など）
・各グループのリーダーがじゃんけんで遊ぶ順番を決める。
・サイコロの目や進むマスを数えたり，マスの文章を読んだりしながらルールに従い遊ぶ。
（１回休み，３マス進む，好きな動物のまねをする，こま回しをする，縄跳びをする等，）

○振り返りをする
・グループごとに振り返りをする。
・グループから出た意見を共有し，クラス全体で振り返りをする。

いーち，にーさーん，し

6秒木になるマスにとまったグループ

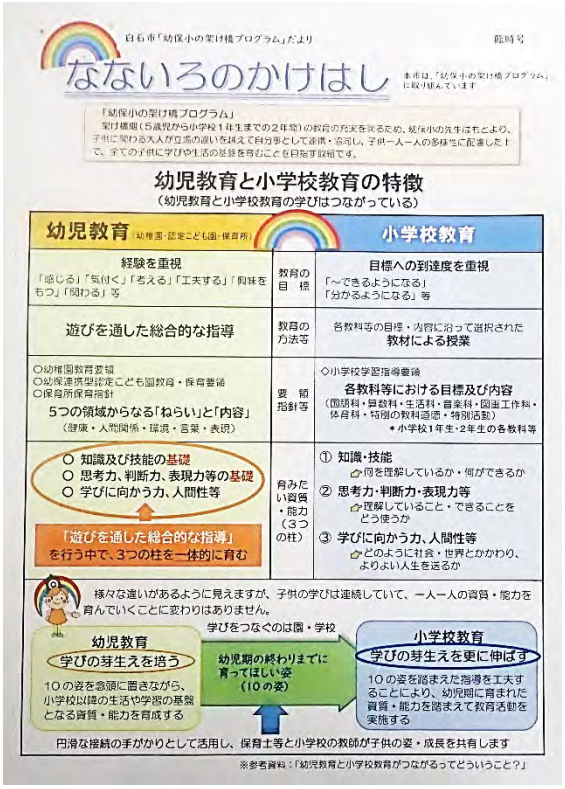
コマとサイコロが小さくてみえにくかった。

64

○「小学校の各教科等における資質・能力とのつながり」は、開発会議での助言を受け、小学校学習指導要領の解説から、教科等、学年、内容について記載した。
○「小学校の各教科等における資質・能力とのつながり」　では、小学校への学びのつながりを小学校教師が意識し授業に反映できるものとした。
○「環境を生かした幼児の活動」について
　・各園では他の園の実践を参考にする
　・小学校では５歳児が経験したことを把握し、授業展開の参考にする

２　幼児教育と小学校教育の特徴、幼児教育の遊びを通した学びについての理解資料の作成

一日体験研修や理解研修後の報告書やアンケートから、幼児教育は小学校教育の前倒しではないことへの理解が十分とはいえない感想が見られたこと、本市の幼児教育も遊びを通した学びを大切にして実践していることを周知する資料が必要であると考え、「幼保小の架け橋プログラム」だよりの臨時号という形で作成した。



・表は、「幼児教育と小学校教育がつながるってどういうこと」を参考に幼児教育と小学校教育の特徴をまとめた。
・幼児教育と小学校教育をつなぐのは就学前施設（各園）と小学校（各校）の役割であること、また、円滑な接続の手がかりとして、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を参考にしていることを明記した。

・裏面には、協力園の実践例を紹介し、小学校教師に「遊びを通した学び」について理解を図る資料の一つとして読んもらうために作成した。

＜教材等の成果と課題＞

＜成果＞

・理解資料は、保護者にも理解してもらうことができる内容で周知したいという声を受けデータを各園及び各小中学校に送付し、保護者にも読んでもらうことした。
・アプローチカリキュラム「実践資料集」の作成過程を通して、５歳児担任等が他の園での実践を自園でも取り入れてみることができた。

＜課題＞

・アプローチカリキュラム「実践資料集」は、令和６年度の３月に完成したもので小学校での活用はこれからである。
・４月のスタートカリキュラム理解研修で活用の仕方を説明する。

５－３．その他の支援

＜その他の支援の概要＞

１　白石市小学校見学会の実施　（令和５年度から実施）

・５歳児が就学予定の小学校を親子で見学し、在校生と交流する活動を行った。５歳児が小学校を自分の目で見て小学生と交流することにより小学校への思い膨らませてもらう機会とするために開催した。

・事後に、各園で見学会に参加した感想、就学に向けて楽しみなこと、心配なことについて聞き取りを行い、開発会議や運営会議で内容の共有を図った。５歳児の声を各小学校で次年度の見学会に生かしていく。

【目　的】
・５歳児主体の見学・体験活動とする
【日　時】
・市内同日での開催
【場　所】
・入学予定の小学校へ参加
【内　容】
・学校見学と体験活動の時間、内容、交流する学年は、小学校が決める

令和６年１１月２２日

令和７年４月小学校へ入学するお子様の保護者の皆様へ

白石市教育委員会

白石市校長会幼保小連携担当

令和６年度　白石市小学校見学会の開催について（御案内）

本市では、文部科学省から委託を受け「幼保小の架け橋プログラム事業」に取り組んでいます。このたび、幼児教育から学校教育への円滑な接続を行う目的の一つとして、入学を予定している小学校での学校見学会を市内一斉に開催します。学校内を見学する時間とお子様が在校生と体験活動をする機会を設定しました。

つきましては、開催の趣旨を御理解いただくとともに、保護者の皆様には当日の参加について御協力くださいますようお願い申し上げます。

記

１　目　的

令和７年４月に小学校に入学する５歳児とその保護者が入学予定の小学校を見学し、授業や在校生との交流活動を通して学校生活の様子をイメージする機会とするもの。

２　日　時　**令和６年１２月１７日（火）　午後１時３０分開始**

※受付時間、終了予定時刻は各小学校の計画によります（裏面を御確認ください）

３　場　所　市内の各小学校（入学を予定している小学校へ参加ください）

白石第一小学校、白石第二小学校、越河小学校、大平小学校、大鷹沢小学校
白川小学校、福岡小学校、深谷小学校、小原小学校の９校で開催

＊転居等により本市以外へ入学予定の御家庭の方も、学校を選択して参加ください。

４　内　容　①小学校長挨拶、見学会の流れの説明
②学校見学（授業の雰囲気や校内の様子を見てまわる）
③在校生との体験活動等（各小学校の計画：裏面で御確認ください）
④終わりの会、連絡

５　お願い　①当日の各小学校の日程は裏面を御覧ください。日程・内容等を掲載しています。
②当日は、御家庭で上履きを持参願います。（お子様は上靴がよいと思います）
③参加申込は、電子入力での申込になります。
下記の申込方法にそって御回答いただき申込をお願いいたします。

６　参加申込方法　下記のURLか、QRコードに接続いただき、１２月３日（火）までに御回答ください。

（参加申込用URL）　**（参加申込用QRコード）**

① 入力フォーム画面の案内に従い、選択や入力をしてください。
・お子様が通っている園名と、参加する小学校名は、▼を押して選択してください。
・お子様と保護者様の名前は、入力してください。
② 回答後、［→確認画面へ進む］を押して入力内容確認をしてください。
③ ［→送信］を押してください。申込は完了です。

見学会に関するお問合せは、担当へ御連絡願います。

＜担当＞ 白石市教育委員会 学校管理課
白石市教育委員会 こども未来課

【事後の保護者へのアンケートから】

１ 実施について

・「実施するのがよい　」７３%、「どちらでもよい」 ２４％ （９７%が肯定的）

２ ５歳児の反応について

・「参加できてよかったようだ」９０％

◇その内容から（複数選択可）

・小学生との交流　　９１％

・学校内の施設等見学　７２％

３ 保護者の反応

・「おおむね満足」７１％　　「物足りない」２４％

◇その内容から（複数選択可）　◇その内容から（複数選択可）

・学校内見学　　８６％　　・交流活動の中身　６０％

・交流の様子参観　７０％

４ 課題等（保護者の思い）

・交流活動の内容を検討してほしい

・５歳児が分かりやすいゲームなどを考えてほしい

・説明の時間が短く、ルールが複雑でないゲームなどがよい

・園で慣れている歌や音楽を取り入れたほうがよい

保護者アンケートから参加した５歳児の反応はおおむねよいと考えられる。５歳児主体の見学会を設定していることを考えると内容については保護者の思いとの乖離があることが分かった。

＜成果＞

・５歳児が具体的な小学校のイメージをもつことにつながってきたこと。

・小学生との交流から就学に向けて期待が膨らんできていること、在校生の活動の姿を見て自分たちもやってみたいという気持ちをもつことにつながっていること。

・見学会で見たことや交流したことを基に、５歳児が就学に向けて楽しみなこと、心配なこと、不安なことを事後の聞き取りで具体的に話すことができたこと。このことが架け橋期のカリキュラムに反映させることができる一つの声となっていること。

＜課題＞

・小学生との交流活動について、５歳児のための交流であることを考えた活動となるように検討していく。

・小学校見学会について各小学校が校内全体で共有を図り、受け入れる体制を整える。

・１月下旬から２月上旬に各小学校で実施する「一日入学」とのコンセプトの違いを明確にしていかなければならない。小学校見学会の趣旨が５歳児主体の見学、交流の場であることについて保護者への周知の仕方を検討していく。

６．本事業に取り組んだことによる成果

６－１．自治体における成果

＜自治体における成果＞

１　教育委員会教育部こども未来課の新設による幼保一元化を図ったこと

令和６年度の４月から教育委員会に「こども未来課」が新設となった。背景としては保育園・認定こども園に関する業務と幼稚園に関する業務を統合し、未就学児の教育の充実と推進を図るとともに、小中学校との連携体制を一層強化し、保育及び授業の質の向上を目指していることがあげられる。

こども未来課の新設で幼保一元化となり、学校管理課の指導主事は、こども未来課の指導主事や幼児教育アドバイザーと一緒に保育園を訪問して保育を参観しやすくなった。

２　市内全ての幼保小間の関係構築と相互の教育活動への理解が図られたこと

本市は、平成２４年に接続カリキュラム作成委員会を設置し、幼保小の接続の在り方の検討を進めて以来、幼児教育と小学校教育の円滑な接続に努めてきた。しかし、コロナ禍の影響で感染症拡大防止の観点から幼稚園や保育園の教諭・保育士等と小学校教師が顔を合わせて話し合う機会が減り、幼保小間での関係性は十分とはいえない状況にあった。

そこで本事業に取り組むに当たり、相互の教育活動の理解と幼保小の関係構築を図ることを基盤とした。相互理解を図るために一日体験研修、保育参観、授業参観を柱に研修を行った。

一日体験研修は、幼児教育と小学校教育を肌で感じる機会、幼保小間で顔の見える関係を構築する機会として大きな役割を果たした。研修の振り返りを行いながら子供の姿や相互の思いを自由に話し合うことで、お互いに心の距離感も縮まり相互理解が進んだ。特に、保育者の対応や環境の構成などに触れることができたことは小学校教師にとっては大きな収穫となった。

＜管理職、体験者から数多く寄せられた内容＞

・自身の目で、子供の姿や環境も含めた教育活動に触れることが、この事業を進めていく原動力になっている。相互間での子供の姿への理解と、顔の見える関係の構築につながった成果は大きいと感じる。
・年２回ずつ行った小学校体験研修と保育体験研修は、互いの教育活動や子供たちの実態を把握するとてもよい機会であった。この研修からより深く互いを理解し、その後の保育や授業の改善につながっている。今後も体験研修を継続し、より多くの教諭・保育士等に体験させたい。
・定期的に運営会議や合同研修で情報交換を設定したことで、顔の見える関係づくりができてきた。継続させることにより互いの保育・教育内容の質の向上に資する話し合いに高めたい。

（就学前施設保育者の多かった感想から）

・学校が身近になってきた。子供の姿を見て成長の過程や課題も捉えてもらうことができた。先生同士のつながりができたメリットが大きい。

（小学校教師の多かった感想から）

・子供の主体的な姿を引き出すために環境構成の工夫をしていることを知った。５歳児ができることがたくさんあることを肌で感じた。一年生はゼロからのスタートではないという意味を５歳児の姿を見て理解することができた。

３　架け橋期の全体計画、接続カリキュラムを整備し実践、検証できた

幼稚園教育要領・保育指針等の改訂に伴い、令和２年３月には接続カリキュラム第二次改訂版をまとめたが、その後のコロナ禍の影響で、実践・検証がなかなか進まない現状であった。

⑴ 就学前施設での成果

＜保育者の声から＞

・カリキュラムを参考にしながら、主体的に活動するために自分でできた、やってみようという意欲を持たせる保育に変わってきた。初めての５歳児担任だったが不安から自信につながった。
・架け橋期のカリキュラムがあることで子供の姿を捉え、年間を通して保育計画の中に意識して取り入れるようになった。
・子供の姿を見て時期が適切か、今ならどれが実践できるのか、あるいは実践できないのかなどをじっくり考えるようになった。５歳児担任でなくても他の年齢でも実践できそうだと感じる。
・振り返りの会で、幼児教育施設同士でカリキュラムの実践事例を見合うことで自分の実践とは環境の構成などが違うことに気付くことができ、それを取り入れてみようと柔軟な気持ちになった。

＜管理職の声から＞

・担任がカリキュラムを意識することにより子供にどんな経験がどんな関わりが必要なのかを意識して保育ができていた。
・計画的に自園のカリキュラムの中にアプローチカリキュラムを入れることで、毎月活動内容を確認して保育に取り組むことができた。
・月案の中にアプローチカリキュラムを取り入れたことで、意識して就学に向けて生活を見直し、遊びを取上げていくことができている。

⑵ 小学校での成果

＜１年生担任の声から＞

・週案タイプのモデルプランがあり、初めての１年生担任として指標となった。
・接続を意識し、入学してから学校生活で配慮したいことを一つずつ確認しながら子供たちと接するようにした。また、子供たちにとってどんな活動を取り入れると安心感につながるのかを支援員と共有できた。
・園でやっていた手遊びや歌、読み聞かせを行うことで児童の心が安定するのを感じた。

＜管理職の声から＞

・幼保との円滑な接続を意識しながら次年度の計画を立案しようとしている。
・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が具体的に示されており、スムーズな接続や指導の手掛かりになることがある。
・幼児期と同じような内容を学習する際、幼児教育での経験を基にねらいを設定したり、学習内容を考えたりすることができた。

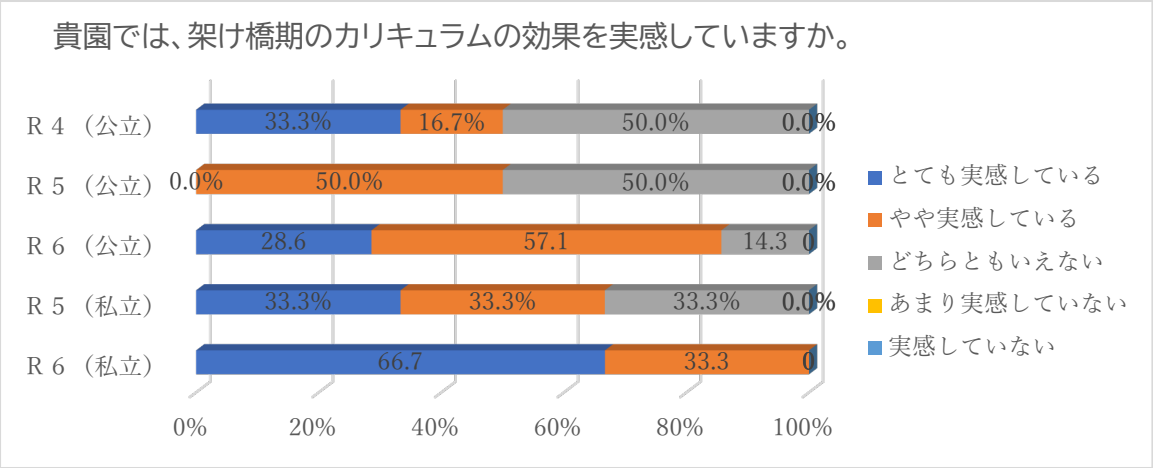
初めての担任となってもカリキュラムにより不安が軽減することにつながっていること、また、他者からの支援をもらう場合に「環境の構成」や「配慮したい支援」についての内容を共有できること、そしてそのことが子供たちの生活にも効果的に働くことが成果となっている。

＜定量的・定性的な調査結果＞

就学前施設の管理職等、教諭・保育士等及び小学校の管理職、教諭・講師等を対象に行ったアンケートからの抜粋　（＊私立の就学前施設は令和５年度から事業に参加）

１　架け橋期のカリキュラムの効果について　（管理職対象）

【就学前施設園長等】

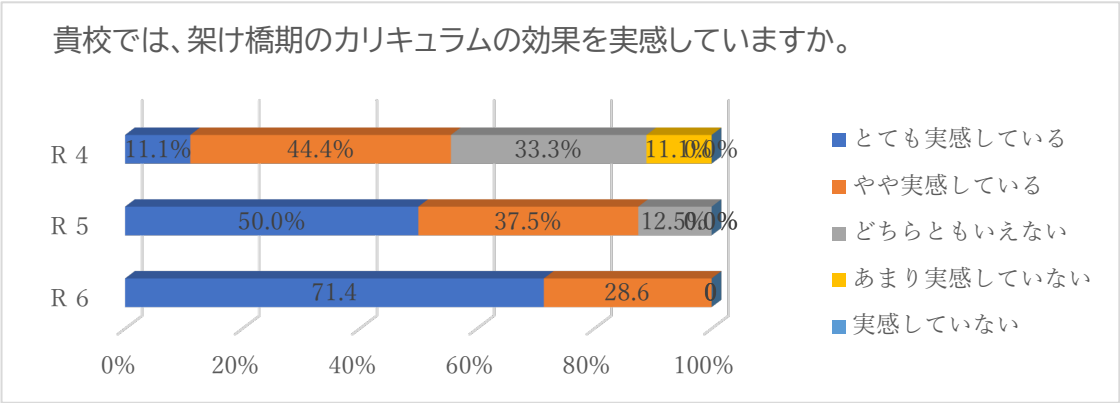


○公立、私立ともに３年目（６年度）には「とても実感している」「やや実感している」が80%を超え効果を感じていることが分かった。

（効果の内容）

・カリキュラムにより特に５歳児の担任の意識が高まったこと。
・体験研修により互いを理解することや小学校への理解が深まったこと。
・小学校との距離感が少なくなり、やりとりがしやすくなったこと。
・子供たちが小学校への不安が少しずつ減ってきていること。

【小学校教頭】



○３年目（６年度）は、「どちらともいえない」「あまり実感していない」がなくなり小学校では効果を大きく感じていることが分かった。

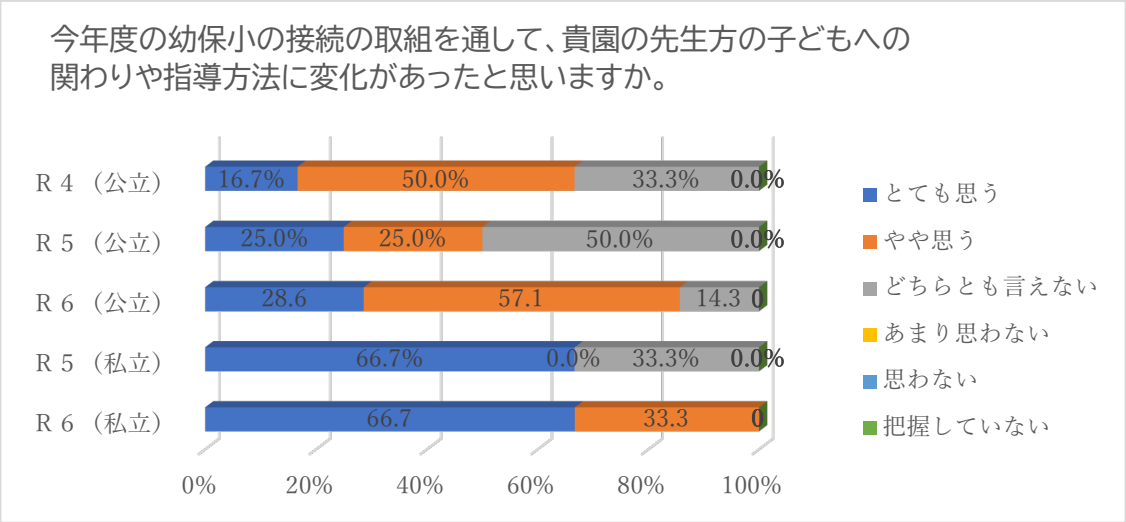
（効果の内容）

・教員が園とのつながりを意識するように変化したこと、指導に変化が出てきたこと。
・体験研修に参加した教員の意識が変化してきていること。
・１年生が小学校生活を比較的安定して過ごしていること。

以上の結果から、カリキュラムの効果は指導者の変化により、子供たちにもよい結果につながっていると考えることができる。

２　先生方の子供への関わりや指導方法の変化について　（管理職対象）

【就学前施設園長等】



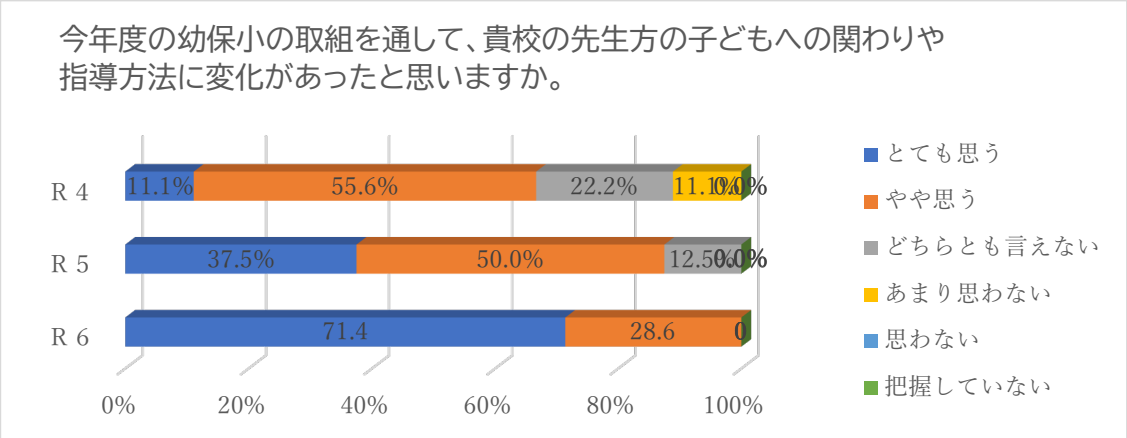
○３年目（６年度）は、公立では「とても思う」「やや思う」が 80%を超えている。私立では「とても思う」「やや思う」を合わせると 100%であり、ともに変化を感じていることが分かった。

（効果の内容）

・体験研修や交流活動により相互理解が図られ、話し合いで得たことを保育に生かすようになったこと。

・就学に向け滑らかな接続を意識した活動を取り入れるようになったこと。

【小学校教頭】



○３年目（６年度）は、「とても思う」「やや思う」を合わせると 100%となった。「とても思う」が 70%を超え、大きな変化を感じていることが分かった。

（効果の内容）

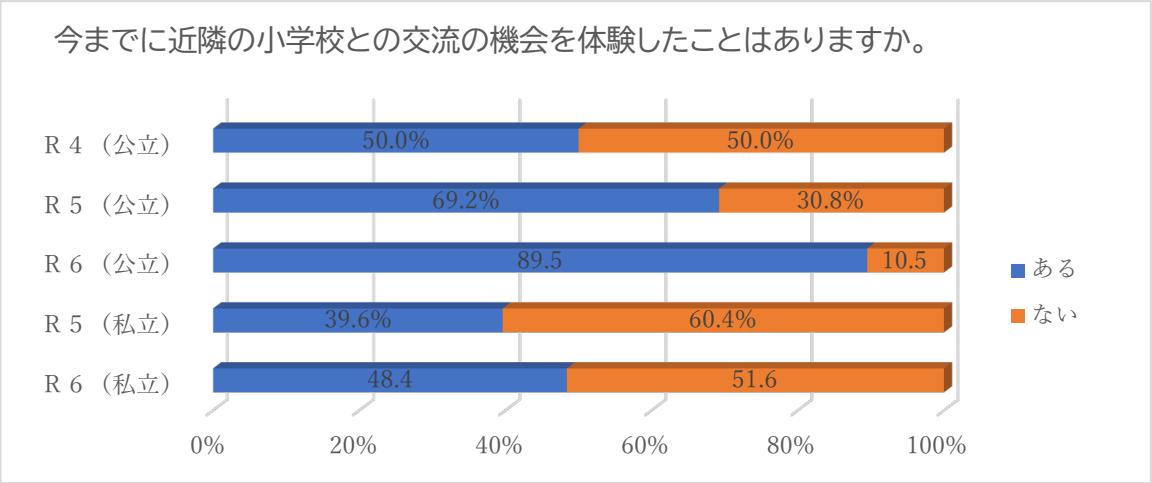
・子供の主体性を生かすように教員の意識が変化したこと。

・幼児期の経験や学びを理解できたこと（幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の理解も含む）。

・環境整備（環境の構成）の大切さを学び、教室経営に変化が出てきたこと。

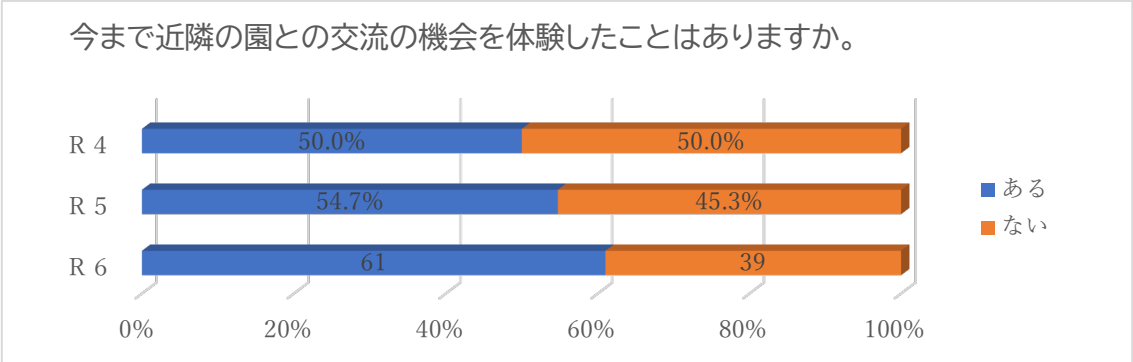
以上の結果から、相互の教育について理解が図られたことにより指導方法が管理職が期待するよい方向に変化してきていると考えることができる。

３　小学校との交流を体験したことがあるか（一日体験研修を含む）について
【就学前施設　教諭・保育士等】



〇一日体験研修での小学校教員との交流や小学生との交流活動により体験の機会が年度ごとに増えてきていることが分かった。
（あると回答した教諭・保育士等が感じた子供たちの変化の内容）
・就学への不安が少なくなってきていること。特に障害のある子にとっては交流による本人の不安解消につながっていること。
・小学校のイメージを具体的にもつことができるようになってきていること、就学に向けて期待が膨らんできていること。
・小学生が活動の姿を見て自分もやってみたいという気持ちをもつ子が増えてきていること。

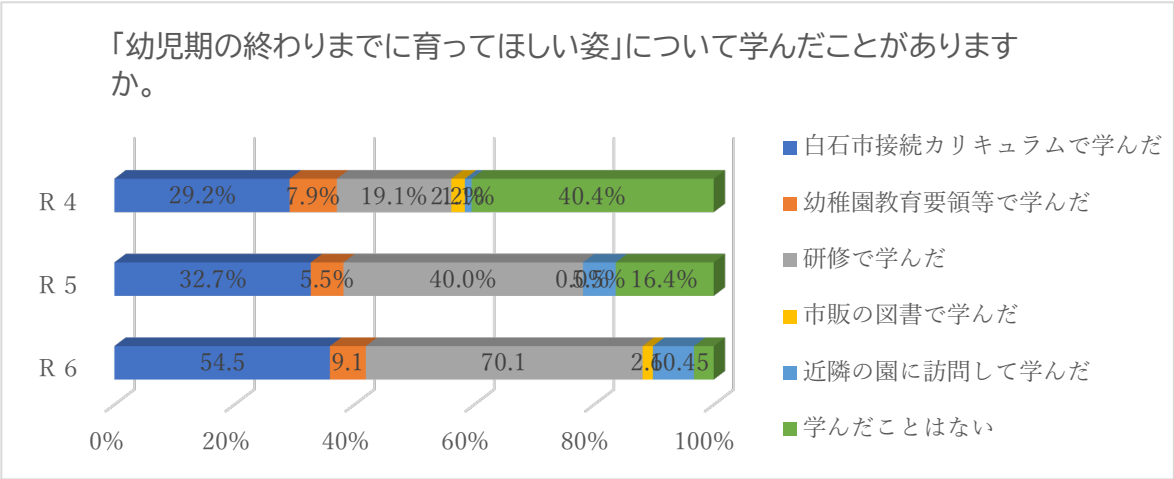
４　就学前施設との交流を体験したことがあるか（一日体験研修を含む）について
【小学校教諭・講師等】



〇一日体験研修での保育士等との交流や就学前施設との交流活動、小学校見学会での５歳児との交流活動により体験の機会が年度ごとに着実に増えてきていることが分かった。
（あると回答した教諭・保育士等が感じた子供たちの変化の内容）
・１年生は、１年前の自分たちを思い出しながら相手意識をもって交流を考える姿が見られること。
・上級生として役に立つ喜びや教える喜び、認められる喜びを実感していること。
・５歳児と関わることで主体的に行動する姿が見られるようになっていること。

以上の結果から、一日研修等の成果により相互の関係構築が図られ、幼保小間の交流活動が着実に増えてきていること、交流を通して５歳児及び小学生の意識が前向きに変化してきていると考えることができる。

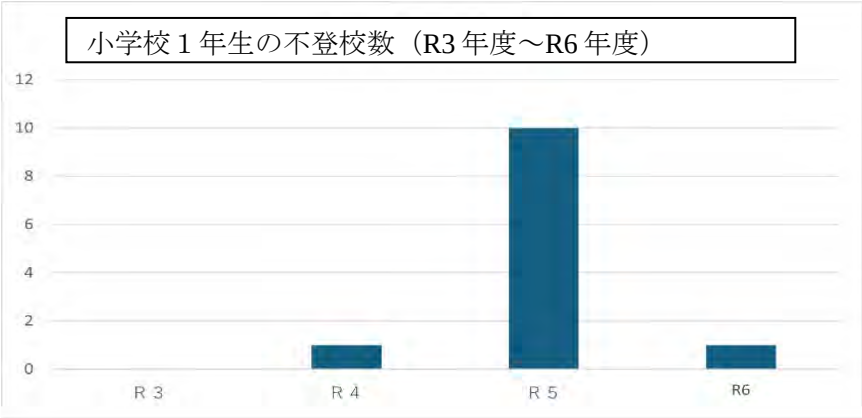
５　「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について
【小学校教諭・講師等】（複数回答可）



○１年目（４年度）は「学んだことがない」が 40%であったが、「研修で学んだ」「近隣の園に訪問して学んだ」が年度ごとに増加し、３年目（６年度）には「学んだことがない」は 5%まで減少したことが分かった。

この結果から、理解研修や一日体験研修を実施したことにより、小学校教員の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の理解が進んできたと考えることができる。

６　令和３年度から令和６年度までの本市小学校１年生の不登校数について



事業２年目の令和５年度は、市内で１０名の１年生が不登校となった。３年目の６年度は市内で１名と大きく減少したデータとなっている。

小学校管理職の令和６年度のアンケートからも、１年生が小学校生活に適応していることや登校しぶりが見られなかったことが複数の自由記述から読み取ることができた。この自由記述は“架け橋期のカリキュラムの効果を実感していますか”の設問で、「とても実感している」「やや実感している」と回答した場合にどのような点で実感しているかを書いたものであることから、取組の成果の一つとして捉えている。

６－２．園・校における成果

＜先生方の指導と子供の姿の変容＞

１　就学前施設

⑴ 先生の指導に関して

・一人一人の興味関心がどこにあるのか捉え、環境の工夫によって幼児が同じ経験ができるように配慮するようになった。また、カリキュラムを参考にしながら保育に取り入れ、幼児が主体的に活動するための環境構成や援助、さらに就学までのつながりを考えながら保育するようになってきた。

・幼保小の交流を通して職員同士が幼児の成長過程や課題を共有することができるようになり、小学校へのつながりをイメージしやすくなってきている。さらに運営会議で提出された実践事例に刺激され、実践方法の違いに気づき自分の保育に取り入れてみようと柔軟な気持ちになってきている。

・日常の保育の中で幼児の姿を見たり声を聴き取ったりすることで、幼児のやってみたい気持ちを受け止め、どう実践につなげようか常に考えて幼児と一緒に環境づくりをするようになった。

・幼保小の職員間で情報交換の際に、深いところまで話ができるようになり得られた情報を日々の保育に生かせるようになってきている。

⑵ 子供の姿の変容に関して

・交流を通して学校が身近になっており、自分の就学先でなくても興味をもって交流先の学校の体験活動に楽しく参加している。

・ｐ４ｃを通して互いの思いに気づくことができ、意見をよく聞いたり話したりする姿が良く見られるようになった。なぜそう考えるのか、自分は「こう思う」と伝えながら、相手の思いも受け止め考えるようになり、折り合いのつけかたも身についてきており、方向性が見いだせるようになってきた。

・「ごっこあそび」では幼児自らの発想で遊びを展開させて友達と工夫して発展させている姿が見られている。発想が豊かになっていると感じられる。

・小学校見学会以降は、小学生を意識し始めて「自分でやってみよう」「やってみたい」「きっとできる」と進んで活動に取り組むようになった。

２　小学校

⑴ 先生の指導に関して

・「まだこれはできないだろう」と先取りしてしまうのではなく、これまでの育ちを振り返り、今必要な経験は何なのか見通しを持つことが大事だと意識しながら指導するように努めた。

・子供たちを「どのように指導しようか」から、「どのように環境を整えれば、学びが広がり、深まるだろうか」に意識が変化した。

・単元の学習の前提として、幼児期のどのような学びがあったのか、それをどのように生かせるかを考えて単元を組み立てるようになった。

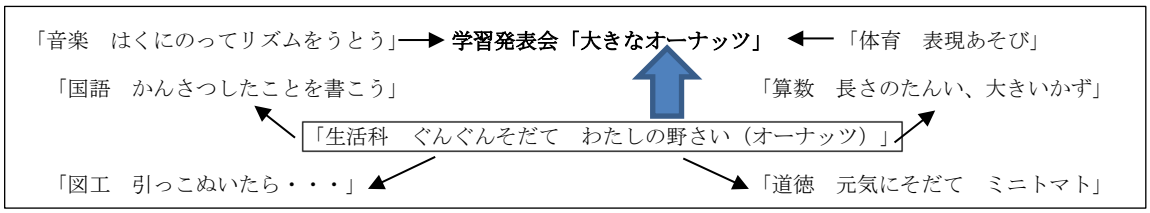
・架け橋期を学ぶことで、保育園・幼稚園等でたくさんの経験をして多くを学んできていることを前提として授業を展開するようになった。児童は、嬉しそうに経験を伝えるので、園での体験は大切な思い出であり財産となっていると感じるようになった。

・小学校では１から全てを教えるのではなく、幼稚園・保育園でしてきた経験を想起させたり、知っていることを引き出したりしながら授業を展開していくようになった。

・架け橋プログラムの資料を参照し、架け橋期に児童がどのような経験をしてきているのかを確認した上で、単元計画を立てるようにしようと考えるようになった。

・保育園や幼稚園での一日のスケジュールが小学校の時間割と大きなギャップがあることが分かり入学後の計画を考えるようになった。
・これまでも、少しずつ小学校生活のリズムに慣れるよう遊びを取り入れた学習を多く取り入れるように心掛けてきたが、１つの活動の時間をゆったりと確保するようにしたり、子供たちの興味からスムーズに学習につなげるようにしたりと工夫をすることが増えた。子供たちにとって、小学校生活を楽しんで過ごせるようにさらに手立てを考えていきたいと思うようになった。
・遊びに力を入れるようになった。生活科の「水で遊ぼう」「雪で遊ぼう」では、プラ容器を遊びの道具として活用し、子供たちと一緒に遊びを楽しんだ。子供たちと同じ目線に立った時、子供ならではの着眼点や季節を感じ取る感性が分かってきたような感じがする。
・幼保での体験を意識して声掛け、問い掛け、指導するようになった。学習面、生活面ともに、ゼロからのスタート・指導ではなく、児童が分かっていることやできることは「確認」「見守る」を心掛けるようになった。

(2) 子供の姿の変容に関して
・生活科で朝顔を育てる学習を行う際、幼稚園や保育園で植物を育てた経験を思い起こさせ、元気に育つために大切なことは何かを考えた。児童は、それぞれの園で育てた植物の話をたくさん話してくれた。
・児童は、幼稚園や保育園での遊びを通して得た経験や知識を活用して学習に取り組む姿が見られた。
・休み時間と授業の切り替えや、授業の中での活動の切り替えの際、手遊びを取り入れた。一つ一つの活動に集中して取り組むことができた
・秋の自然の特徴を探したり、手触りから他の季節との違いを実感したりした。楽しんだ経験を園児と一緒におもちゃパーティーを開き、楽しみたいという児童の発言から、おもちゃパーティーを開くことを決めた。その際、園児と関わる上で、気を付けたいことや楽しめる方法を進んで模索する姿が見られた。
・朝の会や音楽の授業の導入で、遊び歌を取り入れてきた。児童は楽しそうに歌ったり体を動かしたりしていた。その後の活動にも意欲的に取り組むことができた。
・生活科単元デザインを参考に、生活科「ぐんぐんそだて　わたしの野さい」を中心とした、教科横断的な学習活動を実践した。



「もしもオーナッツがとても大きかったら…」と劇のアイデアを考える時は、児童から生活科と結びついた発想が次々に挙がるようになった。
・保育園で、園の畑を利用して野菜を栽培していた。そのことを踏まえ、小学校の生活科で校庭に野菜を植える前に、これまでの経験を出し合う場を設けた。
　→水をあげすぎて上手く育たなかった経験が話題として挙がり、水やりの仕方を調べる学習につながった。
・保育体験のときに見た場の設定が参考になった。
　→児童同士が考えを交流できる場や活動に専念できるスペースを小学校の授業でも設けたことで考えが深まったり新たな気付きが生まれたりした。

＜保護者の反応＞

・各園がドキュメンテーションで交流活動の幼児の様子を保護者に随時発信することで、「入学前から交流ができ子供たちは安心材料になる。とても助かる」などの声が聞かれている。
・交流の際に小学校から体験したコーナーでカードなどのおみやげをもらって帰ると、親子に会話が生まれて家庭内で会話のきっかけづくりになった。学校見学会後は「教頭先生と話したよ」など具体的な話をするようになった。
・交流といわれても想像できなかった姿は、物を見たり会話を通して「これはおもしろそうだね」と活動について具体的に話したりするようになった。また、交流が複数回になると教師の名前を覚えて会話するようになった。
・バスに乗って各学校を巡ったことは、学校を身近に感じていろいろ見ることができたので今後も続けてほしいと要望があった。
・交流や学校体験の後は保護者と幼児、保護者と保育者の具体的な会話が弾むようになった。
・交流活動を通して得意、不得意が分かり、その後の家庭での対応につながった。
・小学校にその園からは一人しか入学しないことを知り不安に思っていた保護者がいた。その園は幼保小間の交流の他に、横のつながりで幼稚園と保育園の交流を計画的に行っていたことから交流の中で他の園の子と顔見知りになった。幼児同士が同じ学校へ就学することを知り、意気投合して仲良しになったという事例があり安心感が芽生えたという。
入学前からいろいろと交流することで良い関係ができていることが分かり、縦のつながりだけでなく横のつながりも大切にすることで今後につながることが理解できたケースだった。

幼保小間や幼保間での交流、小学校見学会での校内見学や交流活動により、就学前に学校の様子を知る機会が増えたことで、子供の様子が意欲的になったことを肯定的に捉えていることが分かった。

７．今後の課題と展望

本市での架け橋期の取り組みについてはこれから保護者や地域への周知、啓発が必要であり課題と捉えている。

各園、各校においてはそれぞれで交流活動、体験活動等の取り組みについて配信や広報活動を随時行っている。しかし、一般の地域住民には架け橋プログラムの内容や活動そのものの広報活動は行っておらず、地域全体の理解、周知に至っていないのが現状である。

まずは、教育委員会のホームページや市の広報などを利用して地域へ発信していきたい。

また、各地域の公民館等にも活動への理解を求め、活動や交流の様子等をドキュメンテーションで示したものを掲示させてもらうなど、外部へ向けて情報の発信を行っていきたいと考えている。

作成した全体計画やカリキュラムの資料集は、園、校それぞれに保存、保管されるように配布している。活用については、関係者の説明会で共有しており、園の教育課程や全体計画また、学校でも教育課程に取り入れ実践につながるように計画している。

資料集については、実践例を基に真似たり独自の展開をしたりしながら、それぞれで実践を積み重ねていく。その都度、資料集に追加してどの活動の実践がなされたのかが分かるように職員間で共有できるようにしたいと考えている。「生活」「人」「学び」の３つの「つなぐ」を発展させられるように記録を取り、積み重ねていくことが今後の課題である。また定期的に振り返り研修を行い、他の園や小学校での取り組みを知ることで新しい気付きが得られ、幼児や児童の姿を共有することができ、課題についても話し合える関係性を構築していきたい。ＰＤＣＡサイクルの確立を目指して自治体として支援体制を整えて実践しやすい環境を作っていきたい。

８．まとめ

接続には施設類型、校種間の壁を越えて職員同士の話合いが気軽にできる人間関係、人と人とのつながりが一番大切だと考える。

話合いができる土壌作りはそれぞれの管理職の理解が基本である。時間と場の設定など、定期的な接点を保ちつつ、目指す子供の姿を確認していきたい。さらに、自治体が各施設間をつなぎ、進捗状況を把握して調整を行ない、継続できる体制を維持する必要があると考える。

国は採択自治体だけでなく、日本各地で幼保小の架け橋プログラム事業の普及を目的に、多くの自治体の例を取り上げながら研修会を実施してほしいと思う。オンラインはもちろんだが、対面式の研修は臨場感がある。

本市では横山視学官に「幼保小の架け橋プログラム」理解研修会で２年続けて講演をしていただいた。併せて協力園と協力校の交流活動の実践例を発表したことで関係者への理解が進んだと認識している。幼保小の接続に携わる関係者が同じ研修を受講して、方向性や課題を共有できて今後につなぐことができる対面式の研修会を全国各地で展開してほしいと考える。採択自治体だけでなく広くいろいろな場所で展開できたら事業理解が進むと考えている。

関係者だけでなく広く社会全体への発信も、今後行っていくことが期待されると思う。ホームページは関係者しか開かないと思われるので、老若男女問わず多くの人々の目に触れられるようにSNS発信やYouTube配信も増やしてほしい。

♪あそびがまなび　まなびがあそび　やってみたいが学びの芽♪

文部科学省から楽しい遊び歌を考えていただいている。この歌を世代を超えて口ずさんでいけたらなんて素敵ではないだろうか。社会へ理解が広がる一歩なのではないか。

「架け橋プログラム」という言葉が独り歩きするのではなく、中身を理解できるようにリーフレットや広報誌をドキュメンテーション方式で作成して、一般向けの発信を継続的にできれば近い将来、理解が深化していくものと考える。